

Title	懷德堂記念會會務報告
Author(s)	
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90223
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

懷德堂紀念會會務報告

報告書

懷德堂記念會編纂

第一章 創立

(一) 發端

方今學術勃興し、教化普及して、文運の盛なる、前古比なし、然れども一世の風尚、動もすれば智育に偏して、德育は踐履に疎なる者あり、以て巧詐漸く長じて風俗漸く薄きを致し、破倫敗徳の行は閭巷に續出し、世道人心の汚下、將に底止する所を知らざらんとす、識者の深慨太息する所以なり、

嘗て窮に以謂らく、我が國民道徳の大本は、萬邦に卓絶せる國體に在りて、古來其の大本を培養せし所以の者は、國體と一致せる儒教の倫理綱常と爲す、是れ 列聖教化の淵源にして、其の人心に入ること久しく且つ深し、畏くも 今上の國民に諭したまひし教育の勅語のごとき、國體に根據して儒教に原本し、字々句々、經籍に胚胎するは、蓋し此が爲なり、然るに維新以來、風氣の開發に急にして、新學新説を尙び、儒教は殆んど忘られたるが如くなりし餘風、延きて今日に至る、國民道徳の大本を養ふ所以の者は、之を措きて問はざるの傾向に陥れり、德育の効果を奏し難きも亦宜ならずや、伏して惟みるに、維新五誓の一に、廣く智識を世界に求むと宣らせられ、教育勅語の道徳に關する大旨は、國體と儒教とに根原せるは、

實に學問教化の大方針と謂ふべく、國民たるもの、一面には銳意新學新説を攝取して、智識を世界に求め、一面には國民道德の大本を養ふに、其淵源する所を忘れず、以て心形並に文明の域に躋らんことを要す、本會は此の見解を以て、儒教の倫理綱常を講明して以て世道人心の汚下を挽救せんと欲す、

我が大阪は古來商業を以て繁榮を致せり、然れども文化の開けたるも亦久しく、市井の間に學者輩出せしが、儒教の教育は、實に懷德堂に負ふ所大なり、懷德堂は享保九年に創立し、同十一年に官許を得てより、明治二年の廢絶に至るまで、絃誦を絶ざること百四十餘年に及びし大阪唯一の學校なり、創立の功は中井發庵と五同志とを推し、最初の教主は三宅石庵にして、其子春樓は發庵と相踵ぎて鐸を秉りしが、五井蘭洲は此に教鞭を執ること前後二十餘年にして、其の門下に發庵の二子竹山、履軒の二大儒を出してより、規模の恢闊を致し、學問文章、經濟教育の盛なる、殆んど京江を壓倒し、竹山の子蕉園、碩果、履軒の孫桐園、及び竹山の外孫並河寒泉等、相踵ぎて儒業を守り、以て市民と四方の俊髦とを教育し、桃李門に滿ち、學派の分布海内に遍ねし、而して市民の最も宜しく感銘すべきは、大阪の風教を維持すること久しかりし功績なり、大阪の繁榮は商業に在り、商業の本は信用に在り、信用は德義より來り、德義を涵養するは教育に在り、懷德堂の教育は大阪の商業に大關係ありて、今日の富と繁榮とも、亦其の教化に負ふ所の者蓋し大なり、況んや世道人心を維持せんとするには、儒教の廢す可からざる、言を待ざるをや、大阪人たるもの宜しく懷德堂の恩を記して昔日の感化を將來に及ぼす所以を謀らざる可からず、是れ時病に對する適宜の一策なり、

大阪人文會は大阪府立圖書館長今井貫一君の首唱に係り、大阪人文の發達を調査し、幽を闡き微を顯はし

て以て文化と風教とに貢献せんとする在阪好學の士より成れる者なり、明治四十三年一月十九日、圖書館樓上に開きし例會の席上に於て、會員西村時彦君、懷德堂教授たりし五井蘭洲先生の傳を講演せしに、講畢て後ち、懷德堂師儒諸先生の爲に公祭を舉行すべしとの議は、全會一致を以て議決されたり、是より先き中井竹山先生の曾孫中井木菟麿君は、大阪市史編纂主任幸田成友君を介して西村君に面し、文學博士重野安釋君の意を傳へて懷德堂公祭の舉に謀り及びしことあり、西村君は幸田君と相携へて大阪府教育會長高崎親章君を訪ひ、其意見を叩きて同意を得けるも、議未だ熟せず、時未だ到らずして、其事中輟しけるを、此に至りて人文會の議忽ち決して、首唱實行の責に任せんこととなりしは、會員全體の篤志に出づ、是れ實に本會創立の發端なり、

(一) 發起人

大阪人文會の議に曰く、懷德堂は中井氏の私學に非ずして、幕府の保護と志ある市民の協力とに成りし公立の學問所なり、然れば公祭は大阪人文會の私すべきに非ず、大阪府教育會は勿論、(當時市教育會は解散して未だ復興せざりき)懷德堂に縁故深き鴻池善右衛門君(懷德堂創立五同志の一人なる鴻池宗古は其の一族の祖なり)住友吉左衛門君(其の一族にして別子銅山に功ありし入江育齋通稱泉屋理兵衛は性理學を修めたるが五井蘭洲の門人なり)を初として、同志の紳士に請ふに發起人たらんことを以てすべしと、因て同年九月會員西村時彦君は、會の決議を齎して歴訪勸説する所ありしに、左の人々は皆深厚なる同意を表し、此の擧の世道人心に大關係あるを賛し、奮て發起の責に任ずべしとの快諾を得たり、是に於て本會

の發起人確定せり、左の如し、

大阪府教育會

大阪商業會
議所會頭

土居通夫

大阪府知事

大阪人文會

高崎親章

大阪朝日新
聞社長

村山龍平

大阪市長

植村俊平

前大阪朝日
新聞社長

上野理一

三十四銀行
頭取

藤田平太郎

鴻池銀行主

鴻池善右衛門

大阪毎日新
聞社長

小山健三

島村久

本山彦一

住友銀行主

住友吉左衛門

鈴木馬左也

(三) 會頭副會頭推薦

四十三年九月廿五日後一時より發起人會を府立圖書館樓上に開けり、此日參會の人々左の如し、

今井貫一君

橋詰良一君

西村時彦君

村山龍平君

馬渡俊雄君

植村俊平君

上野理一君

上松寅三君

小山健三君

木崎愛吉君

島村久君

久松定憲君

住友吉左衛門君

鈴木馬左也君

(いろは順)

(いろは順)

先づ會頭副會頭の互選を行ひしに、衆皆住友吉左衛門君を會頭に、小山健三君を副會頭に推し、辭讓再三の後に承諾を得たり、次に住友會頭より委員長を西村時彦君に囑托し、各係主任及び委員は追て指名囑托する事に決せり、公祭の期日は、懷德堂開講の記念日なる十月五日（創立は享保九年なれども、官許後の開講記念日は同十一年なり）に決せしも、尋常蘋蘩を薦するのみにては慊たらざるを以て、諸儒の遺著を出版して永久の記念と爲し、之を奠し之を頌ちて、長く後人をして其の學徳の感化を享けしめん若かず、其の準備に時日を要すべきに、本年は期日既に迫れるを以て、來る四十四年の十月五日を期すべしと議決せられ、終に趣意書及び會則を議決して此に本會は成立せり、

(四) 趣意書及び會則

發起人會に於て議決せし本會の趣意書及び、會則左の如し、

懷德堂記念祭趣旨

維新前に於ける我が大阪唯一の學校なりし懷德堂は、中井贅庵先生が、大阪の商人なる中村睦峯（三星屋武右衛門）富永芳春（道明寺屋吉左衛門）長崎克之（船橋屋四郎右衛門）吉田盈枝（備前屋吉兵衛）山中宗古（鴻池又四郎）の五有志と謀りて、諸同志を糾合し、三宅石庵先生を聘して尼ヶ崎町一丁目北側（今其の跡は今橋通四丁目北側）に創立せし者にして、時に享保九年なり、同十一年幕府の官許を得てより、大阪學問所とも稱し、石庵先生歿後は贅庵先生學主と爲り、五井蘭洲先生教鞭を執る者、前後二十年、尋ぎて贅菴の子なる竹山（懷德堂學主）履軒（水哉館塾主）二先生囑起してより、大阪の文

學、雄を海内に稱し、子孫相繼ぎて業を世にし、以て維新の際に至り、世態一變して、學校も亦廢したりしが、創立より廢學に至るまで、絃誦を絶たざるもの、實に百四十餘年なり、竹山履軒二先生の門、人材輩出して海内に分布し、以て一世の文化を振興せり、斯る大儒を我が大阪に出し、は、豊太閣の大阪城にも譲らざる偉蹟と謂ふべし、然れども我々後人の最も深く懷德堂に感銘する所以の者は大阪唯一の學校として大阪の文教を主るもの久しく、大阪人を教育して其の品性を養ひ、其風俗を正し、以て世道人心を維持せしに在り、我が大阪は古より商業を以て著はれ、國運振張の今日に在りて、亦商工業の中心と稱せらるゝ所以の者は、古來養成したる大阪人の品性と良習慣とに起因すべく、品性と良習慣とは、並に教化の致す所にして、懷德堂百四十餘年間の文教に負ふ所の者莫大なり、君教師は之を三恩と曰ふ、報本反始は人の道なり、大阪人たるもの、今日の盛を致す所以を思ふて、而して祖先の受けたる教化の恩を銘し、以て將來の徳育に留心せざる可らず、顧ふに天地の在らん限り、人類幸福の基礎は道徳に在り、國家の隆昌も、社會の平和も、家庭の安樂も、皆此に根抵す、而して商業上道德の尙ぶ可きは、固より言を待たず、古來の教化の効、能く盛を今日に致せる大阪が、亦能く繁榮を將來に獲んと欲せば、一たび其の頭を回して源に溯り故を温ねんことを要す、則ち我が大阪人が今古に俯仰して、自ら省み、自ら戒むるに適當なるは、懷德堂の歴史に若くなし、是れ懷德堂記念祭の舉ある所以なり、日を明治四十四年十月五日（十月五日は幕府の官許を得て講を開きたる記念日なり）に卜し、祭壇を中之島公會堂に設けて、三宅五井中井並河諸先生の靈を祭り、且つ碩學を聘して講演を開き、遺書を刊行し、遺墨を展覽し、以て一は百四十餘年教化の恩に報い、一は世道人心の振興に資する所あらんとす、此に

其の趣旨を明にし、伏て大方諸君の賛成を請ふ、

明治四十三年十月五日

發起人

大阪府教育會

大阪人文會

土居通夫

高崎親章

村山龍平

植村俊平

上野理一

藤田平太郎

鴻池善右衛門

小山健三

島村久

本山彦一

住友吉左衛門

鈴木馬左也

(いろいろは順)

懷德堂記念會會則

第一條 本會ハ明治四十四年十月五日ヲトシ懷德堂記念祭ヲ執行スルヲ以テ目的トス

第二條 本會ハ懷德堂記念會ト稱シ事務所ヲ當分大阪銀行集會所内ニ置ク

第三條 會員ヲ分テ左ノ三種トス

一 名譽會員 會頭ノ依頼セルモノ

二 特別會員 金拾圓以上ヲ齎出シタルモノ

三 通常會員 金壹圓以上ヲ醸出シタルモノ

第四條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク

會頭 壹名 副會頭 壹名 委員長 壹名

監事 若干名 委員 若干名

第五條 會頭副會頭ハ發起人會ニ於テ推舉シ其他ノ役員ハ會頭之ヲ選囑ス

第六條 役員ノ任務ハ別ニ定ムル所ニヨル

第七條 本會ノ副事業トシテ左ノ事ヲ舉行ス

一 大學ノ教授及ビ碩儒ヲ聘シ記念講演會(二日間)ヲ開ク

二 記念出版物ヲ刊行シ、記念品ヲ作ル

三 懷德堂諸先哲ノ遺著、遺物展覽會(五日間)ヲ開ク

第八條 會員ニハ記念出版物等ヲ頒ツ

第九條 會費醸集ノ外、現金ノ出納保管ハ三十四銀行ニ依托ス

第十條 會計報告ハ會員芳名錄ト共ニ印刷配付ス但シ剩餘金ノ處分ハ役員會ノ決議ニヨル

斯くて本會の成立及び趣意書、會則は、祭典期日滿一年前なる十月五日を以て大阪各新聞紙上に發表せられたり、

(五) 監事、各係主任と委員

其の後に會頭より指名囑托せられし監事、各係主任及び委員諸君の氏名左の如し

監事

梶山延太郎君 村上庸吉君

總務係

主任 今井貫一君

磯野於菟介君	岩本雪太君	今川一君
傍土定次君	林文三君	橋詰良一君
伴直之助君	西谷庄藏君	本多左右太君
土岐達君	岡田佐太郎君	岡田吉五郎君
小川平馬君	小笹國雄君	小瀬三男君
渡邊勝君	河田爲作君	角田勤一郎君
吉川善兵衛君	谷口福太郎君	高安六郎君
高見龜君	中尾清太郎君	紫安新九郎君
上松寅三君	梅山惠省君	井上昌次君
野村菊太郎君	大谷増吉君	朽木十吉君

楠品次君

山本清太郎君

松尾源太郎君

松本朝吉君

増田種松君

船越三郎兵衛君

藤村守壽君

藤井清兵衛君

青木仁作君

東捨次郎君

阪田耘平君

木谷正之助君

北里闌君

木津本虎三君

木崎愛吉君

木下貞太郎君

水落庄兵衛君

宮島茂次郎君

白男川實福君

白井章君

志貴覺瑞君

清水常次郎君

久松定憲君

姫岡豊吉君

砂原萬次郎君

角樋榮造君

(いろは順以下進之)

祭典係

主任 久松定憲君

稻村眞里君

生田福太郎君

渡邊勝君

瀧山瑄君

打越竹三郎君

藤澤元造君

櫻井時太郎君

編纂係

主任 木崎愛吉君

磯野於菟介君

濱和助君

西村時彦君

講演係

主任 角田勤一郎君

橋詰良一君

井上昌次君

北里 闌君

展覽會

主任 水落庄兵衛君

磯野於菟介君

今川 一君

楞野豐明君

柳川善左衛門君

植村平兵衛君

山中與七君

木崎愛吉君

上松寅三君
松村九兵衛君
一柳安太郎君

大道弘雄君
藤澤元造君

大田源之助君
鹿田靜七君

永田好三郎君

牧 卷次郎君

島田伊兵衛君

中井新三郎君
三宮元勝君

井上熊次郎君

濱 和助君

高木彌一君

中井新三郎君

正木善次郎君

山中吉兵衛君

吹田辰之亮君

生田福太郎君

西尾桂吉君

瀧山 瑄君

中尾謙吉君

山中吉郎兵衛君

兒島嘉助君

宮武外骨君

門田里江君

會計係

主任 今井貫一君

小山田竹二郎君

永田好三郎君

上松寅三君

打越竹三郎君

山口大造君

山本清太郎君

馬淵永義君

鹿田靜七君

島田伊兵衛君

第二章 會員

由來本會は報本反始を第一義とせるを以て本會の成立するや先づ中井家遺族故舊に之を告知し、明治四十三年十月五日、大阪朝日新聞、大阪毎日新聞、大阪新報、大阪時事新報、大阪日報の各社に依頼し、同日發行の紙上に於て本會の成立を湖江に告白すると共に有志者の入會を勧誘せり、

尋で府下殊に當市内の篤志家、并に府下官公私立中等程度以上の學校に向つて、數千通の勧誘狀に本會旨趣書を添へて郵送し、一般の人士には學術講演會を開き及び市内日刊新聞紙上を以て其趣旨を知らしめ、又時々之の狀況を報導せり、

猶其趣旨の普及と入會者の便を圖り傍士定次君、小川平馬君、岡田佐太郎君（以上東區）阪田耘平君、松尾源太郎君（以上西區）紫安新九郎君、小瀬三男君（以上南區）白男川實福君、角槌榮造君（以上北區）

に總務委員を、猶此等諸君を補助するの委員二百九十三名を囑托したり、
學術講演會は明治四十四年三月十一日を以て中ノ島公會堂に於て開き、本會の趣旨の普及と風教に資する
所あらんことを圖りき其講師演題左の如し、

開會の辭

今井、貫一君

商賣と學問

植村俊平君

問はず語り

角田勤一郎君

懷德堂の沿革

西村時彦君

大阪の偉人

鈴木馬左也君

大阪大學の設立

中橋徳五郎君

市民の品性

小山健三君

此講演は大に聽衆を感動し、會場に於て入會贊助を申込む者多く、從て世の耳目を聳動したり、加之前掲
の委員諸君は所在に活動し、或は文書を以てし或は機會を利用して勸説し、市内の諸新聞社は本會時々の
狀況報導に其紙面を割愛して、共に多大の援助を與へられたるを以て、入會者は日に其數を加へ、南は九
州、北は北海道に亘り、特別會員六百二十二名普通會員一千三百七十名を得たり、其芳名左の如し

特別會員

日名子太郎君

田中内記君

本田長一郎君

勝本忠兵衛君

豊福徹三君

近藤喜祿君

多田藤吉君

山中新右衛門君

山木藤助君	湯川寬吉君	岡橋治助君	小川爲次郎君	磯野於菟介君	鹽見政次君	辻忠右衛門君	濱崎永三郎君	星野行則君	松本端君	緒方收二郎君	佐々木爲助君	藤井清兵衛君	砂原萬治郎君	森平兵衛君	佐野興兵衛君	清海復三郎君	渡邊千代三郎君	原田棟一郎君	石井勝治郎君	高木彌一君	矢田市兵衛君	中井勝太郎君	杉浦理三郎君
岩橋米三郎君	本尾敬三郎君	久保無二雄君	田中太七郎君	今井貫一君	梅原龜七君	尼崎伊三郎君	岩井勝次郎君	八田兵次郎君	蔣智由君	二川茂助君	古莊一雄君	吉川善兵衛君	大田源之助君	吉田眞一君	鹽野吉兵衛君	矢野政敏君	八代則彦君	本多精一君	山瀬十吉君	山本仙助君	吉田定七君	岡島伊八君	松本甚之助君
津田勝五郎君	緒方正清君	千々岩英一君	寺田甚與茂君	打越竹三郎君	宮崎敬介君	河野徹志君	濱崎康君	末吉勘四郎君	小西勝一君	渡邊勝君	湯川玄洋君	鹿田靜七君	楞野豐明君	菅沼豐次郎君	柏尾木之助君	仁村條三郎君	牧卷次郎君	土屋元作君	増田種松君	生谷卯兵衛君	島田喜十郎君	西尾治三郎君	西野安次郎君
小倉正恒君	井上周君	川村利兵衛君	永井仙助君	高安六郎君	池原鹿之助君	藪田忠次郎君	青木恒三郎君	山崎豐三郎君	谷川清澄君	宮島茂次郎君	船越三郎兵衛君	宮武外骨君	小山田竹次郎君	柿崎欽吾君	志方勢七君	齋藤周吉君	淺田靜夫君	上野麻藏君	松田松次郎君	木村敬次郎君	勝浦庄次郎君	藤井音松君	高橋藤右衛門君

吉田國松君	明路常吉君	吉田利三郎君	櫻井傳之輔君
中村覺藏君	萩原忠兵衛君	安東周藏君	至田清記君
白岩文造君	龜井喜兵衛君	松井全方君	久松定憲君
鳴戶嘉七君	喜多村桂一郎君	生田南水君	宇野良造君
高安道成君	富岡久君	朝田喜三郎君	戶田猶七君
鈴木重藏君	岡村増太郎君	坂野兼通君	岸田奎君
吹田辰之亮君	今西林三郎君	八木興三郎君	植野繁太郎君
駒井庄太郎君	藤澤元造君	永井豐君	門田利助君
水上長次郎君	弘世助太郎君	莊保勝藏君	永田好三郎君
皿井立太郎君	梶原仲治君	竹島新三郎君	粟津久治郎君
渡邊麻次郎君	加納讓君	小森理吉郎君	岩本榮之助君
山中平兵衛君	山中直七君	龜岡德太郎君	藤田助七君
岩崎利兵衛君	戶田耕藏君	肥田熊藏君	森久兵衛君
宮崎齋十郎君	村田又兵衛君	青木庫治郎君	越野嘉助君
池田半兵衛君	一柳安次郎君	野田吉兵衛君	大道弘雄君
河田爲作君	鶴澤總明君	橫尾孝之亮君	清野勇君
廣岡郁子君	西田永助君	根津卯之助君	山西甚兵衛君
德高平右衛門君	藤田善兵衛君	猪飼九兵衛君	酒井猪太郎君
阪上新治郎君	井上德兵衛君	辻村榮助君	金澤仁作君
武田元助君	山田惣兵衛君	柳琢藏君	河野豐次郎君
陶山孝輔君	杉野民之助君	喜多非利兵衛君	阿賀伊兵衛君
木下久次郎君	山村作次郎君	吉田伊右衛門君	高田竹松君
筒井嘉兵衛君	森本清兵衛君	岸本五兵衛君	木村巳三郎君
増原吉兵衛君	古結喜太郎君	八木喜助君	長門勇輔君

木村源次郎君	高 原 龜 三 郎 君	中 川 文 吉 君	前 島 七 郎 左 衛 門 君
中 島 市 右 衛 門 君	中 島 米 次 郎 君	筒 井 民 次 郎 君	谷 岡 岩 次 郎 君
中 谷 德 恭 君	北 島 長 七 君	岡 崎 曠 教 君	渡 邊 碩 造 君
平 尾 藤 吉 君	林 源 次 郎 君	中 澤 喜 藏 君	西 山 卯 之 助 君
小 森 末 三 郎 君	若 江 延 吉 君	井 上 土 之 助 君	久 下 亦 藏 君
石 井 長 次 郎 君	平 松 德 兵 衛 君	熊 橋 健 一 君	桑 原 榊 五 郎 君
野 村 伊 之 助 君	猪 飼 史 郎 君	浮 田 忠 治 郎 君	金 澤 利 助 君
伊 藤 佐 助 君	津 田 豐 次 郎 君	橘 善 四 郎 君	弓 場 庄 兵 衛 君
吉 田 一 太 郎 君	浦 芳 松 君	後 藤 院 正 六 君	伊 藤 忠 兵 衛 君
伊 庭 真 剛 君	中 原 誠 也 君	脇 坂 安 之 君	黑 田 宗 太 郎 君
須 藤 真 三 君	麓 東 生 君	近 藤 安 太 郎 君	桑 田 房 吉 君
貴 志 彌 右 衛 門 君	加 藤 恒 忠 君	小 寺 成 藏 君	木 崎 愛 吉 君
宮 崎 彌 三 郎 君	木 島 櫻 谷 君	島 山 太 郎 君	竹 田 與 右 衛 門 君
松 山 與 兵 衛 君	高 見 龜 君	草 島 有 尙 君	草 島 銚 太 郎 君
草 島 彦 一 君	大 谷 順 作 君	故 上 府 古 君	伊 佐 壽 君
爲 村 佐 一 郎 君	湯 川 福 太 郎 君	森 田 治 郎 兵 衛 君	嘉 納 治 兵 衛 君
永 峰 柴 熊 君	玉 手 伊 右 衛 門 君	矢 野 半 次 郎 君	室 谷 鈇 麿 君
前 川 種 次 郎 君	廣 部 正 三 君	石 波 安 治 郎 君	石 河 幸 三 郎 君
濱 利 助 君	鈴 木 驛 次 君	栗 山 寬 一 君	小 田 實 乘 君
一 海 景 明 君	吉 村 安 兵 衛 君	石 田 辰 次 郎 君	伊 東 忠 兵 衛 君
松 本 益 藏 君	井 上 嘉 兵 衛 君	新 井 久 兵 衛 君	矢 邊 清 兵 衛 君
巽 宗 七 君	中 川 兵 次 郎 君	鎌 田 長 七 君	岸 井 六 左 衛 門 君
大 藤 庄 兵 衛 君	中 彌 兵 衛 君	益 田 信 三 郎 君	齋 藤 彌 七 君
山 中 興 七 君	和 田 達 源 君	石 濱 純 太 郎 君	菅 沼 達 吉 君

小西平兵衛君	井口藤兵衛君	八田兵次郎君	西村保太郎君
草鹿丁卯次郎君	大平武助君	上田光子君	今井檜三君
人見米次郎君	筑紫三次郎君	濱田榮藏君	大塚多市君
法覺小兵衛君	鈴木重臣君	松田宗則君	有岡直七君
紙本佐兵衛君	河野天瑞君	高島平介君	小林欽君
堀田善五郎君	太井武夫君	橫山鑛太郎君	山口伊勢松君
中村勝次郎君	鹿島圓次郎君	松本重太郎君	東真三郎君
鹽谷永藏君	藪内仙藏君	中島政二郎君	平泉豐三郎君
田口謙吉君	森功君	田淵彌三平君	下村市造君
加藤彰廉君	楠品次君	植田一郎君	井上信太郎君
奥田吉右衛門君	長野孫治郎君	淺井彌兵衛君	國井照陽君
大原榎太郎君	西浦又兵衛君	長尾善兵衛君	喜多檜藏君
平野平兵衛君	福田六次郎君	吉川重次郎君	早瀬太郎三郎君
澁谷史春君	河野一造君	西海作治郎君	日納藤七郎君
小西儀助君	河中原造君	小笹國雄君	龍見竹之助君
海老友次郎君	福島喜藏君	巖又兵衛君	坪井連水君
服部勘一郎君	小野三郎右衛門君	長明辰藏君	菅井豐藏君
宮崎彌作君	川瀬正七君	岩田惣三郎君	池内六兵衛君
齋藤儀三郎君	種谷喜兵衛君	松本朝吉君	生島嘉藏君
杉村正太郎君	伊藤九兵衛君	山田市郎兵衛君	小山忠兵衛君
吉崎善三郎君	太田宇兵衛君	村井庄七君	西尾宗七君
安本作兵衛君	藤川治平君	原井半兵衛君	正木善七君
北村太治郎君	改正源右衛門君	覺道作右衛門君	下村光之助君
田中吉太郎君	杉木勘七君	久保田與市君	勝浦宗兵衛君

栗谷喜八君	辰馬圭助君	山岡順太郎君	丸山幹治君	本江千太郎君	吉多邦藏君	山添哲之助君	野村德七君	有澤基次君	主計佐市郎君	飯田吉太郎君	阿部市三郎君	田中辰藏君	佐藤壽夫君	安田源三郎君	市川藤兵衛君	古座谷武兵衛君	寺中平右衛門君	瀨川彦四郎君	今井三之助君	川越七郎右衛門君	鷺尾久太郎君	小松武平君	角田勤一郎君
岸本吉右衛門君	西崎作次郎君	一戸兵衛君	吉非章五君	長尾良吉君	瀧山瑄君	高安道太郎君	日野九郎兵衛君	乾奈真松君	藤井平治郎君	泉原龜藏君	樋口三郎兵衛君	長澤富三君	北島醇君	木村伊太郎君	渡邊九兵衛君	中田傳兵衛君	板倉清次郎君	安永義章君	宗得常七君	岩崎安治郎君	鷺尾幸治郎君	丸井榮助君	安倍留治君
加藤太治郎君	高木庄助君	高倉藤平君	稻畑惣七君	長谷川萬次郎君	松谷德藏君	木原忠兵衛君	川上利助君	高橋富三郎君	辻川半三郎君	駒本茂君	山口仁兵衛君	野口茂平君	水谷茂兵衛君	永見省一君	益田太三郎君	肥塚庄左衛門君	吉岡又次郎君	藤井竹次郎君	今川一君	山本藤助君	鷺尾良三君	湯淺豐太郎君	中島重德君
平岡其助君	龜岡龜次郎君	北村正治郎君	坪井仙次郎君	鳥居赫雄君	生田虎藏君	阿部房治郎君	山田留吉君	小山彌一郎君	神戶禎吉君	豐田時三郎君	奧田藤兵衛君	國分庄兵衛君	福田久米藏君	小西半兵衛君	田中藤三郎君	上田與三右衛門君	金澤和助君	西成新右衛門君	竹水莊君	松井宇吉君	中山潔君	木積一路君	辻忠右衛門君

青木菊雄君	高原操君	野田欣藏君	岡田茂馬君
島 鯨次郎君	土宜法龍君	油 谷 達君	白神新一郎君
藤崎寅藏君	大川柳三郎君	木村彦右衛門君	紫安新九郎君
阪本龜三郎君	井 上 淺君	勢山庄三郎君	吉田長七君
林 吉兵衛君	小川 德作君	三谷軌宏君	蒲生庄太郎君
津和政吉君	柿本宗兵衛君	木本平兵衛君	澤 順 策君
楊井佐兵衛君	榎本政五郎君	覺道清子君	西井猪之助君
高橋季三郎君	生駒 權七君	西村 輔三君	黒田泉三郎君
渡邊巳之次郎君	菊 池 清君	鮫島 鐵馬君	奥村信太郎君
橋詰 真一君	伊藤喜十郎君	長谷川爲治君	大井徳次郎君
中西平兵衛君	木 木 秀吉君	井上巳喜松君	山田嘉助君
泉原利助君	伊藤音吉君	石橋爲之助君	上松實三君
田邊貞吉君	馬場丈太郎君	光吉元次郎君	檜崎亨造君
二見金助君	辰井梅吉君	竹村嘉造君	松村九兵衛君
柳原庄左衛門君	内藤確介君	菊川長五郎君	安場禎次郎君
渡邊義郎君	三松 俊雄君	山木辰六郎君	楠原武熊君
森 下 博君	豊田善右衛門君	片岡直輝君	戸田關七君
才賀藤吉君	平田讓衛君	守山又三君	豊田宇左衛門君
芝田大吉君	山中吉郎兵衛君	播本孝真君	木村靜幽君
藤中民子君	靜 藤治郎君	右近權左衛門君	山田俊卿君
田附政治郎君	加賀豊三郎君	佐多愛彦君	山口玄洞君
藤村守壽君	藤野龜之助君	廣海二三郎君	大家七平君
西村時彦君	水落庄兵衛君	松方正雄君	アルヒエヒスコア君
平瀬三七雄君	黒川幸七君	新田帶革製造所君	ニ コ ラ イ 君
			阿部彦太郎君

廣岡 惠三君
有賀 長文君
中橋 德五郎君

竹尾 治右衛門君
殿村 平右衛門君
芝川 又右衛門君

中田 錦吉君
高谷 恒太郎君

永田 仁助君
平賀 敏君

普會員

福西 忠治郎君
岡田 愛三君
西尾 真次郎君
吉田 政吉君
風卷 平君
青田 忠時君
植村 柴太郎君
深澤 五三九君
西村 松次郎君
松尾 半平君
山縣 修君
久保 田美英君
武田 楯松君
山本 左一郎君
岡 實康君
末常 琢爾君
柴 直太郎君
淺野 英夫君
垂水 善太郎君

吉村 正輔君
南方 信太郎君
門脇 才藏君
田中 才藏君
下河內 十二藏君
稻葉 宗吉君
中村 英丸君
垣內 兼吉君
岡本 龜太郎君
由良 小一郎君
渡邊 至君
村田 宇一郎君
渡邊 義郎君
笹脇 正造君
清水 芳吉君
安場 禎次郎君
小野 精二郎君
加輪 上勢七君
平澤 眞君

三浦 豐二君
西川 德三君
木津 木虎三君
吉田 音松君
石黒 行平君
相田 典三郎君
西野 法久君
西 哲三郎君
石川 清二君
富田 惠之君
中西 勇君
大里 猪熊君
半田 久雄君
速水 太郎君
勢家 弘藏君
林 正治君
淺野 勇君
眞弓 亮三君
松岡 清次郎君

津田 儀三郎君
天野 綱一君
宮崎 寛造君
下河邊 俊齋君
全田 達次郎君
田葉 直吉君
平野 槌松君
石原 善平君
中村 孝太郎君
田村 八郎君
久保 田眞吾君
大熊 權平君
中館 長三郎君
八田 諒君
角 樋榮造君
富田 彦五郎君
橋高 乙一君
三井 武三郎君
小林 晋一君

田中春三郎君	那須八治郎君	那須善次郎君	鹿田延次郎君
中村喜一君	西木三藏君	吉井章五君	安彦五子君
長尾音吉君	吉木一朗君	辻直太郎君	貴田榮三君
林隆五郎君	林幸太郎君	今井榮藏君	早野文三君
布施萬君	平田專太郎君	三宅由太郎君	石原定孝君
平山午介君	飯田清治郎君	小西卯三郎君	中木安次郎君
朽木十吉君	八木甫君	福原仁菴君	小山源治君
山口福太郎君	近藤就運君	高田仁兵衛君	水野富三郎君
西尾正治郎君	西尾辰三郎君	武田駒太郎君	杉本市郎君
小谷弘君	尾池惇五君	中川和三郎君	柿村重松君
片岡歎次郎君	坪井真平君	龍村ミサヲ君	梨木繁治郎君
黒崎百千堂君	平井政七君	山本忠友君	加藤逢吉君
天坊幸彦君	倉崎仁一郎君	山口新一君	田村和三郎君
濱田毅郎君	細川萩二郎君	西岡源藏君	春日秀三郎君
酒井喜兵衛君	香野一太郎君	香野ヒサ子君	香野一郎君
横田隆彦君	野村菊太郎君	島田良種君	藤野和三郎君
石原虎之助君	澤村郁三君	伊川力馬君	眞鍋せい君
佐藤室吉君	安東きさ君	齋藤時一君	吉田イッ君
堀口靜野君	大塚壑君	小方鴛鴦湖君	山口梅尾君
山村汎温君	寺木眞詮君	藤井秀次君	松本三藏君
岩木カネ君	奥田勝子君	渡邊たま君	辻慶治郎君
松倉武夫君	淺野ソノ君	青野龜三郎君	古山宇一君
德永徳松君	植田清三郎君	岡水留吉君	古山芳三郎君
田中豊次郎君	下村訓賀君	野々村種藏君	浦野音松君

山野助四郎君	三番彦三郎君	大道太助君	原 <small>ゆ</small> く君	宇田修君	井上久兵衛君	古池定吉君	榮木利道君	豐部正三郎君	神尾永三郎君	吉村元造君	今田佐四郎君	西川宗七君	大谷三郎兵衛君	竹林龜次郎君	森佐久造君	岡島千代造君	高麗清次郎君	小鹽覺平君	高橋清三郎君	藤木保治君	林義一郎君	金崎丑松君	大倉まさ君
矢作耕君	岸正形君	岡本利宗君	小野田つね代君	村瀬丑郎君	丸井庄吉君	酒井平吉君	榎木嘉典彦君	佐竹岩吉君	西谷庄藏君	日外須計君	溝口恒吉君	山田龜太郎君	大橋利兵衛君	山木勇吉君	西澤健吉君	山口幸七君	磯上平右衛門君	京極昇三郎君	高橋彌太郎君	齋藤貞藏君	泉兵五郎君	乾市松君	杉原かた君
藪内富三郎君	堀見克禮君	近藤左一郎君	小畑フミ君	寺川俊造君	田淵悟一君	武田眞次郎君	新谷市太郎君	長谷川清治君	尾地元太郎君	小林末吉君	菊園千代三君	長橋節義君	山口松吉君	澤田新三郎君	上田一徳君	中村徳治郎君	山下三五郎君	葛野調七君	山縣良秋君	柴田章太郎君	角井安藏君	高橋文子君	青山春枝君
森田岩松君	田中二郎君	内田琢磨君	松永しゆん君	中野イサ君	平田松三郎君	大塚靖君	坂口芳一君	惠阪駒君	杉江秀君	中尾包時君	三原金三郎君	和田伊之助君	大井伊之吉君	別府禎三郎君	山下喜兵衛君	芝本半兵衛君	園三郎兵衛君	今中武次郎君	中塚一太郎君	鳥羽直一君	安元次磨君	華溪愛君	柿木の君

鈴木八千代君	山村仙一郎君	佐々木惠秀君	馬場シヨウ君	山本千里君	圓丘彌三君	佐竹順造君	栗田カナル君	松井太郎君	貴舟藤吉君	久宿ラケエ君	關口寛一郎君	綿谷忠兵衛君	小野助十郎君	大原安治郎君	岡本秀吉君	治田たつ君	淺井仲藏君	滝川與吉君	川武金右衛門君	榮國庄兵衛君	山本源右衛門君	吉田鶴松君	井上治兵衛君
小出トヨ君	小寺柏麿君	中村春造君	新川サダ君	吉田キヌ君	秋田マサ君	瀧しづ君	中井みつ君	平田福壽君	浦橋幸雄君	村上萬次郎君	神木豊勳君	井上輝雄君	藤本要助君	多賀鹿藏君	山川府之助君	山本峯一君	佛願廣太郎君	井上喜太郎君	島谷島太郎君	柴田セン君	宮城仲藏君	島田小佐久君	松田淺次郎君
大山はな君	植木瑞誓君	楠白石君	木村信次君	中野アサ君	玉田元吉君	原知作君	細野のぶ君	清水作藏君	山口敏行君	工藤爲一君	岸上角次君	奥田松太郎君	高墳徳兵衛君	玉木勘七君	河合銜助君	築部七兵衛君	津田藤吉君	梶田徳松君	川崎分左衛門君	政山龍雄君	佐々木義夫君	福谷富次郎君	木村四郎君
梶谷繁君	藤田直助君	大西ハナ君	長谷川スエ君	安原こはる君	桐重兵衛君	落合貫次郎君	毛利徳太郎君	喜多兼松君	大塚長勝君	山木うめ君	明石宣雄君	八代眞三郎君	江川由松君	小林喜兵衛君	竹永梅吉君	琴谷章二君	上念英吉君	中島利吉君	加藤佐兵衛君	上念政七君	浮田元平君	高橋源七君	川崎直右衛門君

松尾德太郎君
 大西久兵衛君
 國友初衛君
 池田平八君
 阪上芳嶺君
 鯨江うの君
 奥村繁喜君
 永田澤惠君
 本郷アイ君
 小山雲平君
 小笠原久恒君
 竹村菊造君
 片岡春弘君
 高橋梯郎君
 多田寅松君
 木村寛慈君
 野中嘉三君
 友末正夫君
 土肥伊兵衛君
 大道治兵衛君
 村井彌右衛門君
 阿波野榮次郎君
 遠藤壽穂君
 江草方治郎君

衣笠幸七君
 崎島玉次郎君
 楠 稔雄君
 原谷吉藏君
 生方 糸君
 田中重作君
 沖田千代君
 花岡光子君
 片山盛隆君
 井上廣佐君
 立川喜之助君
 井宮助之君
 兒玉正爾君
 渡邊盈作君
 平井武夫君
 小泉幸治君
 島田繁太郎君
 今井茂助君
 河本正次君
 竹島猪三郎君
 淺本信次郎君
 由上又兵衛君
 淺野藤四郎君
 清水彌市朗君

飯田伊兵衛君
 久溜間敬二郎君
 奥野 修君
 津隈三郎君
 仲 甚寛君
 古岳寛三君
 和田政太郎君
 松浦せい君
 島崎アイ君
 大塚直路君
 大原亮吾君
 杉本由太郎君
 中谷元造君
 土橋眞吉君
 大橋廓道君
 五條隆圓君
 龜岡長三君
 池本權右衛門君
 神田吉兵衛君
 田中半兵衛君
 山中吉兵衛君
 常光定吾君
 小竹寅吉君
 西村收藏君

山口慶太郎君
 若林常順君
 赤尾朔二郎君
 田中和三郎君
 高田桑十郎君
 本埜榮治郎君
 曾我部たか君
 中村新次君
 金山品巖君
 諏訪常吉君
 小吹榮三郎君
 佐々木正行君
 田中義達君
 岡 政之助君
 佐谷孫二郎君
 中尾謙吉君
 藤澤章次郎君
 林 藤兵衛君
 吉川房次郎君
 辻並清兵衛君
 山下芳太郎君
 太田由喜馬君
 室石常秀君
 宮脇三之丞君

報
告
書

田中品君	赤尾佐太郎君	田中文右衛門君	齋藤房次郎君	濱地竹次郎君	伴井嘉右衛門君	内田政吉君	内村丑松君	内田源次郎君	檜垣種吉君	林豐治郎君	中井彌吉君	圓山市右衛門君	生野安太郎君	土井伊右衛門君	石橋治兵衛君	鈴木勇太郎君	鈴木重吉君	後藤さく君	栗井保郎君	勝田貞君	藤本正一君	井上ひさ君	八上とめ君
平井正君	片山増五郎君	澤田儀三郎君	倉本三藏君	上田伊藏君	三田重之助君	伊丹富藏君	井上繁吉君	伊藤又藏君	土井マズ君	茂見鎌吉君	秦儀三郎君	大島民藏君	外木市兵衛君	吉田勝兵衛君	伊東常七君	島村玉造君	箕浦忠亮君	東ハル君	飯田リウ君	酒井ふみ君	河野トクエ君	越出榮吉君	辻廣治君
松井喜勝君	吉田久治郎君	尾野伊兵衛君	島谷伊兵衛君	阪上彌三郎君	田中宗一君	近藤南州君	大浦鶴造君	山本丑三郎君	田中辰藏君	田中藤吉君	白小路善之助君	兒島竹次郎君	菅原幸助君	笹脇安右衛門君	泉谷宗兵衛君	水田清三郎君	岸本多七君	長田久吉君	伊島トヨ君	伊藤祐記君	森田アイ君	山本不竈雄君	中野伴治君
山田源次郎君	小野安治郎君	木村善兵衛君	伊藤市太郎君	生野ます君	植村龜之助君	上林清治郎君	井上清兵衛君	速水榮造君	三浦シナ君	三川由太郎君	中澤卯兵衛君	中根新藏君	戸田宗七君	木下彌三郎君	小糸市兵衛君	金井政次郎君	北川松之助君	白莊司甚兵衛君	時田末尾君	池田岩君	秋岡スミ君	棚橋清藏君	上野たれ君

住井虎之助君
 板原治三郎君
 谷 安次郎君
 井上 次作君
 中川忠右衛門君
 大橋菊次郎君
 宇野小七郎君
 小川芳兵衛君
 志木田佐兵衛君
 天濃源兵衛君
 前山龜次郎君
 正司 太郎君
 德 永駒吉君
 額田伊兵衛君
 中島武兵衛君
 南部彌兵衛君
 鮫島次郎兵衛君
 岡田伊三次君
 牧野安太郎君
 中山勘太郎君
 西尾喜太郎君
 伊藤政理君
 山上重三君
 岸本庄兵衛君

西山芳兵衛君
 加藤用三郎君
 大田 清長君
 福田五郎兵衛君
 伊藤 林三君
 坪井善兵衛君
 森 武兵衛君
 杉原伊之助君
 西村新兵衛君
 村松福松君
 原 盛千代君
 年梅貫三郎君
 川口來助君
 村上正一郎君
 堀 兵治郎君
 池本市兵衛君
 中井奈良吉君
 藤田伊兵衛君
 岡本 道男君
 今 堀 新君
 筑紫寛爾君
 野原金次郎君
 富岡官馬君
 沼間馬之助君

池田幸助君
 八田卯兵衛君
 森 理右衛門君
 森 辰次郎君
 笠井龜次郎君
 今宮傳太郎君
 中出新兵衛君
 松本 儀助君
 廣瀨米七君
 廣内嘉兵衛君
 山口竹藏君
 酒井源之助君
 植村勘兵衛君
 辻本德次郎君
 足古清次郎君
 田坂宗之助君
 甲和彌三郎君
 岡田德三郎君
 小原國太郎君
 土 岐 達君
 東 捨治郎君
 安田基三君
 直海玄諦君
 高橋正義君

田村忠次郎君
 津田利助君
 藤原伊太郎君
 植田安兵衛君
 松壽定四郎君
 吉岡 貞吉君
 野村留吉君
 中西藤兵衛君
 上村治三郎君
 岡本芳次郎君
 玉上辰藏君
 上村由太郎君
 鹿田喜右衛門君
 塚原よしへ君
 山中福松君
 岡井秋治君
 吉江治平君
 八上伊三郎君
 小比賀米次君
 吉成卯三君
 長谷川卯三郎君
 岡田沖見君
 岡 劔造君
 隅川三雄君

田中樂吉君	西木重利君	三宅とも君	殿村顯毅君	河合喜三郎君	森内富松君	増田芳松君	北村董治君	志摩惣吉君	成舞房之助君	山本清太郎君	三宅俊次君	富非定助君	前田政次郎君	玉田政太郎君	秦尚古君	戸田安衛君	法西卯之助君	田中兵太郎君	大原樞太郎君	平山猪象君	河原田繁太郎君	東木末吉君	伊達伊三郎君
北三郎君	土井米太郎君	金井甚太郎君	神阪稔造君	岡篤郎君	福井辰吉君	甲斐米吉君	長澤新吾君	堀川徳松君	藤田藤太郎君	木村初太郎君	山村清助君	林宗兵衛君	小西恭平君	渡邊均君	進藤隆之助君	田中芳助君	淺井清太郎君	竹矢節君	梶本利太郎君	木南正宣君	村上類市君	中野治三郎君	靜佐兵衛君
貫名智正君	山本房之丞君	西田猪馬太郎君	久米忠七君	葭本庄次郎君	甲斐卯之助君	三牧春太郎君	金子泰藏君	藤本藤吉君	瀬藤喜又郎君	安達儀一郎君	竹内伊八郎君	堀林之助君	脇坂元之君	田中久三郎君	石川浩爾君	志貴覺瑞君	桃井直貞君	三宅確平君	谷只七君	大西直孝君	初井健太郎君	奥野興三兵衛君	大田和助君
松田熊八君	齋藤迂一君	野田市藏君	於勢眞十郎君	尼子官次郎君	清水竹松君	足立文之助君	甲斐長藏君	西山嘉左衛門君	野田圓次君	大塚蕭君	尾上勁君	須藤半兵衛君	中野壽郎君	黒田正太郎君	平野立夫君	岡本宣清君	河村神三君	稲田穰君	武藤吉三郎君	大谷増吉君	小原秀太郎君	森井和助君	吉田幸次郎君

橋本源兵衛君	岡田菊松君	西川萬司君	鳥谷市兵衛君
山口大造君	木下平君	中尾清太郎君	土橋知之進君
森島假名三君	本城佐兵衛君	朝比奈逸夫君	八木庄三郎君
前野新輔君	米澤源壽郎君	川口市右衛門君	澤田專藏君
上田稔君	國田勘藏君	北井龜太郎君	增田多兵衛君
北得重太郎君	阪本利三郎君	村上米太郎君	後藤佐右衛門君
井上清兵衛君	熊田兵藏君	岩崎彌藏君	玉澤幸助君
三好盛石君	内海淡君	宮原大彦君	谷口福太郎君
河盛彦三郎君	名道行輝君	名道友治郎君	山本貞藏君
富井桂治君	脇坂正之君	谷頭辰兄君	瀧本清一郎君
松川義造君	小林寛信君	石上廉三郎君	下村菊松君
米田如山君	稻村眞里君	清水默次郎君	矢口喜一郎君
河野孝次郎君	角田貫次君	木下貞太郎君	宮本初太郎君
北村常太郎君	淺利音五郎君	佐々木源六君	篠田栗夫君
梅山惠省君	中村健夫君	長谷川正造君	竹村彦平君
池田浩之朗君	菅靖君	赤井直操君	春日醉古君
前田徳次郎君	中村貞義君	門内利助君	山本喜太郎君
阪上仁三郎君	石田定右衛門君	鹽山甚兵衛君	宮崎仲藏君
松田金兵衛君	魚住陽三君	由利岩藏君	廣瀬芳太郎君
草生三郎君	松倉九二君	吉岡利兵衛君	山本治兵衛君
隅田寛治君	奥山駒治郎君	櫻井徳太郎君	永田庄兵衛君
廣政平助君	奥居勝次郎君	久保田鐵三郎君	中島米吉君
岡本忠一君	佐藤彌兵衛君	豐田時三郎君	尾崎榮次郎君
吉岡三次郎君	今西忠兵衛君	山中喜助君	菅野與之造君

山森芳次郎君	岸田與七郎君	泉原龜藏君	佐藤寅之助君
福田富三郎君	山本圭藏君	上田德兵衛君	清水常次郎君
木村谷定七君	福井采吉君	若池和一郎君	末野權之輔君
岩田保太郎君	三河彦聚君	高砂長兵衛君	朝田正兵衛君
伊藤藤三郎君	松井彌助君	香川季三郎君	永田儀助君
小林岩次郎君	山本貞次郎君	小瀬三男君	杉村信義君
太田清太郎君	林俊二郎君	竹内行一君	古屋幸作君
小寺德君	瀧誠義君	西丸哲三君	内山彼得君
山崎兼三郎君	加美長勘平君	兒玉菊子君	伊東祐子君
久保ユウ君	庄司善吉君	大塚德吉君	田口眞寛君
大橋源藏君	山中與一君	菅音治郎君	河澄泰藏君
音川松三郎君	川口源太郎君	山口清次郎君	大槻吉平君
森田郁藏君	瀬川彦四郎君	星野四郎君	山上與平君
石丸五平君	向井宗重郎君	三宮元勝君	中原貞七君
岡本菊江君	長尾薰君	飯田吉三郎君	堤三男君
赤阪龜之助君	影山覺吾君	大塚光正君	十川兵之助君
大高裕一君	星田伊之助君	小川伊助君	加藤佐右衛門君
生駒正義君	中村小兵衛君	中村熊次郎君	照林作治郎君
桶下重藏君	宮林操三君	栗谷伊三郎君	松下房次郎君
石川庄造君	佐々木半兵衛君	坂本伊藏君	矢野丑乙君
中村庄重郎君	田中安治郎君	中島平右衛門君	中島平次郎君
片野榮助君	野崎喜一郎君	辻卯之助君	奥田三四郎君
辻坂新造君	辻坂熊藏君	浮田善三郎君	土田喜右衛門君
根箭德三郎君	鹽田慶太郎君	小野木政吉君	奥留吉君

森 惠 三 君	松 非 豐 吉 君	野 村 惣 治 郎 君	川 合 庄 助 君	江 口 重 雄 君	小 澤 新 六 君	伊 東 祐 慶 君	高 井 孝 次 郎 君	福 井 彌 助 君	楠 村 照 溪 君	倉 田 清 兵 衛 君	山 口 善 藏 君	井 上 千 吉 君	和 田 高 英 君	林 藤 吉 君	江 原 金 兵 衛 君	北 川 喜 三 郎 君	竹 原 甚 右 衛 門 君	小 野 安 治 郎 君	橋 本 貴 一 郎 君	山 本 住 橘 君	坂 本 豐 策 君	山 田 卯 兵 衛 君	生 駒 寅 次 郎 君
松 非 外 次 君	增 田 正 章 君	小 林 政 次 郎 君	森 喜 代 造 君	神 義 鐵 君	鐵 川 吉 兵 衛 君	星 加 金 藏 君	岡 部 乙 次 郎 君	安 井 太 三 郎 君	都 築 卯 市 君	菊 田 藤 七 君	佐 伯 芳 郎 君	淺 野 辰 藏 君	高 橋 久 四 郎 君	長 澤 源 太 郎 君	廣 谷 佐 兵 衛 君	米 谷 新 助 君	金 星 久 兵 衛 君	井 上 益 造 君	笹 谷 新 助 君	辰 巳 利 助 君	宮 本 ク ラ 君	岸 本 卯 三 郎 君	森 庄 助 君
寺 東 晋 君	岡 本 邦 敬 君	大 谷 彌 三 君	木 多 左 右 太 君	池 田 精 一 君	前 田 良 三 君	岩 崎 美 次 君	田 中 束 稻 君	佐 藤 健 吉 郎 君	西 田 音 太 郎 君	内 海 彌 三 郎 君	上 田 清 一 君	福 中 竹 松 君	淺 野 豐 吉 君	山 本 甚 五 郎 君	田 中 義 次 郎 君	岡 崎 才 次 郎 君	米 谷 福 松 君	萬 年 九 平 君	貴 島 皎 君	中 目 敏 行 君	村 井 伊 兵 衛 君	武 部 太 三 郎 君	加 藤 有 行 君
淺 村 勝 君	倉 垣 俊 熙 君	志 賀 庄 司 君	姬 岡 豐 吉 君	今 井 俊 一 君	西 村 淺 子 君	園 千 秋 君	宮 脇 巳 之 助 君	中 村 政 治 君	小 林 藤 之 助 君	吉 村 傳 四 郎 君	善 積 由 兵 衛 君	後 藤 幾 太 郎 君	所 司 原 和 介 君	玉 井 治 良 吉 君	上 田 萬 太 郎 君	植 村 小 七 君	清 水 政 兵 衛 君	吉 崎 常 七 君	古 澤 藤 兵 衛 君	立 入 和 助 君	森 田 利 助 君	黒 田 泉 三 郎 君	生 駒 源 藏 君

白石純一郎君	朝山守君	福井時治君	岸厚四郎君
吉田傳治郎君	松村誠一君	尾崎桂三君	澤田耕喜君
河野 ^{ウキ} 造君	大塚富之助君	北村徳次郎君	宮垣矩章君
江上半造君	松尾松三郎君	清水彌三郎君	中尾泰二郎君
彌川八郎君	柏木精海君	會田龍雄君	稻田禎治郎君
赤羽惣太郎君	田中龍三君	桑山國五郎君	北川伊三郎君
伊藤晋君	深見辰次郎君	稻岡熊二郎君	石川喜三郎君
佐藤忍君	堀江復君	北本富松君	長野藤吉君
木谷米藏君	谷木仁兵衛君	奥田龜松君	豐田保三君
宮本富藏君	池永恒太郎君	松木辰藏君	渡邊作右衛門君
田中淺次郎君	古谷治一郎君	田中富藏君	松井奈良次郎君
鴨口正松君	堀内熊三郎君	江川ツヤ君	岡野長兵衛君
大野幾三郎君	泉重治郎君	白谷吉五郎君	曲直部庄左衛門君
松岡宅兵衛君	江川治兵衛君	加藤周一君	丸井佐助君
仲谷藤右衛門君	島津佐助君	和田半兵衛君	池田市右衛門君
川崎藤兵衛君	勝田作次郎君	米澤源兵衛君	上田友次郎君
黒田吉右衛門君	山瀬徳次郎君	柳信次郎君	元治豊三郎君
才木庄兵衛君	澤井嘉兵衛君	日野嘉三郎君	森川治兵衛君
津川忠兵衛君	大谷藤七君	米田馬太郎君	灘爲藏君
山瀬太兵衛君	荒木源七君	澁谷恒三郎君	清水又七君
稻垣環二君	竹村トラ君	竹村久三郎君	服部彦次郎君
鹿島圓次郎君	前田長三郎君	山口茂兵衛君	矢上彌兵衛君
寺井久助君	近藤喜兵衛君	山下善助君	杉山徳太郎君
川井萬助君	松木長兵衛君	河邊孝次郎君	深野榮助君

後藤七左衛門君	米田松藏君	松本貞倍郎君	明田三兵衛君
播田房吉君	蟹田嘉平君	大河内藤一君	桐木佐兵衛君
粉川市兵衛君	木元新太郎君	荒木榮藏君	湯淺楠次郎君
市野秀吉君	與本寅吉君	南波政吉君	善座長七君
小野伊兵衛君	糸川忠次郎君	北向清次郎君	近藤安次郎君
大串彦五郎君	岸田岩太郎君	津田次郎君	岡野義三郎君
松井伊太郎君	天野善右衛門君	中野茂雄君	山川庄兵衛君
羽倉信一郎君	長浦友之丞君	岸田平右衛門君	山田利兵衛君
長澤市三郎君	福井嘉實君	小林鐵三君	長島重兵衛君
早川宗七君	古林鹿藏君	吉田福松君	真田典三郎君
森居保次郎君	小西八兵衛君	吉田長藏君	高木松兵衛君
郡山庄兵衛君	森川彌三郎君	若林巳之助君	岩田常右衛門君
田中宗兵衛君	大西儀三郎君	梶木嘉助君	藤並松見君
玉手市兵衛君	祭原伊太郎君	正田治郎兵衛君	倭友次郎君
扇 眞助君	藤 戸 基君	藤 戸 秀治君	三野攝平君
北野種次郎君	大野治右衛門君	餘部市郎兵衛君	藤 富 衛君
西山甚兵衛君	佐原忠次郎君	鴻齋十三君	早崎彌兵衛君
淡輪松枝子君	萱野三次郎君	伊達友俊君	西園寺 暢君
大谷竹三郎君	多治見久太郎君	中井源右衛門君	辻本鐘三郎君
須原利三郎君	島 治三郎君	松浦爲四郎君	今井庄太郎君
前尾松太郎君	牧野彌兵衛君	大江萬助君	久保熊次郎君
高島長七君	藤井正一君	堺谷伊助君	出羽政助君
福田清八君	杉本典一郎君	松名仁兵衛君	寺島長兵衛君
恩地宇三郎君	石井孝太郎君	龜田權吉君	泉 吉次郎君

泉吉平君	桶堂正太郎君	永田龜吉君	竹田忠藏君	佐々木計次郎君	中野シヅ君	竹村爲三郎君	木村庄兵衛君	犬養嘉右衛門君	松本直七君	芦田順三郎君	吉田長敬君	和田清兵衛君	宮本利右衛門君	安東忠次郎君	久保郁藏君	川崎惠三郎君	田宮崇俊君	土橋芳兵衛君	長谷川勝助君	島野彌助君	増井卯兵衛君	永野辰之助君	西田正俊君
笹村竹造君	岩田與三郎君	山添市之助君	乾奈真松君	菊田楠吉君	東谷典兵衛君	櫛原新輔君	船木由松君	堀井榮太郎君	堀内善五郎君	阿部房治郎君	森作太郎君	澤卯兵衛君	小泉國松君	吉岡哲夫君	井東貞吉君	加藤吉兵衛君	今西安兵衛君	村井儀三郎君	加茂仁八君	大住種五郎君	平野文助君	木村安次郎君	清水五郎兵衛君
國廣清右衛門君	神山鈴吉君	三好善四郎君	小西藤楠君	森鐵二君	松尾藤助君	小川善次郎君	杉本九兵衛君	木村秀策君	山本爲藏君	戸田清右衛門君	藪本孫三郎君	吉田猪太郎君	膳末次郎君	林與市君	山田德太郎君	三宅市藏君	大西宗三郎君	齋藤市兵衛君	濱野安治郎君	藤本伊八君	盛岡嘉兵衛君	長澤庄吉君	吉村幸太郎君
池田榮三郎君	小澤權兵衛君	山本龜吉君	辻文助君	山本恒七君	打田藤助君	小埜平五郎君	岩崎喜三郎君	小川仁兵衛君	德永芳治郎君	西川清七君	八木福松君	鷺池千九郎君	菅澤武三郎君	福島藤吉君	奥西節三君	西村和平君	泉喜助君	原田源次郎君	竹谷新治郎君	田中菊治郎君	小島喜三郎君	橋本嘉右衛門君	築留勘左衛門君

平野喜兵衛君	一柳安右衛門君	片山由松君	小野力藏君
京本善太郎君	於勢佐兵衛君	土肥五兵衛君	大阪谷東平君
土肥寅吉君	樋口德松君	黒田龜藏君	高瀬松太郎君
松本政助君	市田彌兵衛君	小泉清左衛門君	山口房五郎君
菊田藤四郎君	田中九兵衛君	不破榮次郎君	岩崎定三郎君
伊藤萬助君	村田長兵衛君	上金市右衛門君	上田仙吉君
多田久吉君	逢阪彌君	村山時三君	倉橋與三郎君
宮田仲三郎君	平井龜之助君	山口金助君	上道菊治君
杉本安兵衛君	吉谷寅吉君	鈴木孔友君	橋本種次郎君
前田龍君	村井藤一郎君	成川龜治郎君	仲谷彌三兵衛君
野村吉兵衛君	神吉仁三郎君	藤井正吉君	青柳新左衛門君
中谷土用松君	峰内清兵衛君	山本藤八君	植村平兵衛君
伊藤佐助君	鹿谷仁兵衛君	安木庄兵衛君	妙支豐吉君
遠上善三君	眞柄要人君	西村太郎助君	

同年八月名譽會員十四名を推薦し、左の推戴狀を郵呈せしが何れも承諾の手書を送られたり、

拜啓盛暑之候益御清穰被成御座大慶奉存候備本會儀別紙趣意書之主旨に基き來十月五日懷德堂記念祭を執行し聊世道人心之振興に資し度計畫に有之目下其準備中に御座候就ては本會則第三條の規定に依り閣下(貴下)を名譽會員に推戴し本事業に對する御賛助奉仰度候若御承諾被成下候は、風教之爲に慶幸之至に奉存候右御願申上度如此に御座候敬具

其氏名左の如し

第三章 祭典

祭典は儒禮を用ふ、其細節は釋奠及び先儒の所定に稽へて大體を酌定し、猶拘古奇異の觀を避けんが爲め、鋪設服飾等近世若くは現代の禮俗に従へるもの尠からず、

此祭典を擧ぐるに方り、山階宮殿下は祖王殿下の懷德堂柱駕の芳躅を追念あらせられ、當日特に御使者を差遣され幣帛料を賜はり、爲に祭儀一層の莊重を加へ得たるは感激の至りに堪へざる所とす、

(一) 設備

祭場は大阪市公會堂を用ひ、神壇は堂奥に設けて南面す、神位の制式、祭壇の鋪設等左の如し、

神位 木主、(材檜、縦四尺横二尺五寸厚一尺)

神壇 白木、(材檜、高一尺幅一間奥行二尺五寸)

神壇下床 白布覆之、(背後金屏を繞し立つ)

幃帳 白絹、周縁褐色絹、(幅十四尺、下垂十三尺)

几案 八脚案(材檜、高三尺五寸、長六尺、幅一尺五寸)

神饌 五種(清酒、鏡餅、鯛鯉、鴨、菜果)外に記念刊行書記念菓子を霞盆に載す、

祭場の門頭には盛砂、臺提灯、塙塀一帶には學字幕を張り、大木札には儀式次第を掲示し、又下乗札を建つ、門内右側に幄舎を設けて記念品の配付場とし、軒頭には大國旗を交叉せり、場内は竹欄を以て區劃し、

遺族及門故老席、來賓席、役員席、會員席、一般參拜人席等を設け、別に舞樂臺を裝置したりき、

(二) 式典概況

午前八時には一般參拜者、會員來賓等早くも續々參集せり、同九時第一令の聲傳はるや一同着席し、第二令の聲と共に樂音唳々として起り、及門故老木積一路君、藤鹿之助君祭壇に進みて徐に幃帳を牽げ、神位儼然として見はれ、會衆起立敬禮す、尋で獻饌を行ふ、及門神山鈴吉君、宮崎寛造君、渡邊元成君、大町安敬君、高木彌一君鞠躬如として事を掌る、敬虔の儀容滿場肅然たり、第三令を以て會頭男爵住友吉左衛門君、遺族總代中井木菟麿君、文部大臣長谷場純孝君、代理文部省參事官黒澤久次君、大阪府知事犬塚勝太郎君、大阪市長植村俊平君各祭文を朗讀す、會頭の祭文左の如し、

維明治四十四年十月五日、懷德堂記念會頭從五位勳二等男爵住友吉左衛門、謹以清酌庶羞之奠、致祭於懷德堂師儒諸先生之靈、曰、

於序 神聖肇國、政簡俗淳、始貢經典、百濟王仁、文教乃興、立學明倫、中遭喪亂、道有屈伸、元和以降、尊崇儒術、國覺邑庠、兼收華實、無士無商、皆挾書帙、澗水洋洋、鴻儒輩出、堂曰懷德、規模崇闕、石翁秉鐸、井氏經營、富而好禮、同志五英、蘭門出藍、有二先生、伯氏文章、壓倒群彥、叔子治經、尤稱卓見、學德醇醇、誨而不倦、後代典型、高風遠扇、慶澤沾溉、篤生世賞、繼美乃祖、儒業連縣、絃誦靡絕、百卅餘年、郁々濟々、門法流傳、關西文化、於此爲盛、婦女童蒙、知崇孔孟、頑廉儒立、咸飭厥行、世道人心、一趨於正、大權復古、奎運益隆、溯源探本、前哲之功、學制茲革、講帷忽空、俯仰今昔、

如痛在躬、於序 列聖敷教、忠孝惟寶、何謂文明、在明斯道、扶植綱常、前規誰紹、風範宛在、言念諸老、乃與衆謀、校刊遺書、設壇致祭、清酌嘉魚、物雖不腆、冀鑑我孚、鐘鏗鼓鼙、神其來愉、尙享次に第四令、樂音起り、嚙々たる聲裏に山階宮殿下御使を最先として順次拜禮の儀あり、其序

會 頭 男 爵 住友 吉左衛門 君

遺族總代 中井 木菟麿 君

文部大臣代理 文部省參事官 黑 澤 久 次 君

大阪府知事 犬塚 勝 太 郎 君

大阪市長 植 村 俊 平 君

名譽會員總代 理學博士男爵 菊 池 大 麓 君

講師總代 文學博士 星 野 恒 君

武官總代 第四師團長 一 戶 兵 衛 君

文官總代 大阪控訴院長 古 莊 一 雄 君

副會 頭 小 山 健 三 君

門人總代 伊 藤 介 夫 君

委員總代 西 村 時 彦 君

右了りて第五令、會頭男爵住友吉左衛門君祭壇右側に進みて挨拶の辭を述べ、委員長西村時彦君は本會經過の報告をなし、續て第六令を以て會員順次拜禮し、正午一同退場せり、

(三) 舞樂

釋奠に舞樂を用ひたる古例に倣ひ、祭典當日午後一時より祭場に舞樂を奏したり、管鼓律を協へて典節汗曼、周旋悠揚たり、其目

振鉞 大道楓軒
 澁山三愛

桃李花 辻管 星合清溪
 信彦 三浦森僊

胡蝶 碓碓 春久
 八雄起

陵王 小野樟蔭

陪臚 星合清溪 池田信善
 澤田天來

長慶子

管方

羯鼓 雄郷寶龍

笙 音頭 園正廣利
 石田浪華

篳篥 音頭 大村恕三郎
 小野雅壽

笛 音頭 宗秀雄
 長澤開精
 溪間淨觀

報告書

大鼓

南部 松長

鉦鼓

今幾多 支崇

典雅莊重頗る事に副ひ、午後五時演奏満了せり、今次の奏樂舞樂共に雅亮會の寄附にかゝる、此に厚意を表す、

本祭典に當り、左の諸氏より頭書の物品を献奠せられたれば、此に特記して其厚意を謝す。

祝 餅

一 臺

犬塚 勝 太 郎 氏

竹山先生肖像(金屬版)

百 張

中 井 木 菟 麿 氏

西岡集(金屬版)

百 部

革 島 銛 二 郎 氏

履軒先生燈籠銘拓本

二百張

伊 藤 心 教 氏

第四章 記念刊行

懷德堂師儒の遺著十種を選択編纂して懷德堂遺書と題し記念刊行せり、十種の内蒙養篇を除きては何れも稿本若くは寫本として珍襲せらるゝ未刊の書なり、

論孟首章講義

一 冊

享保十一年十月五日、三宅石庵先生が懷德堂開講最初の講義筆記にして、未だ曾て人間に流布せざる者、

五 孝子傳 一 冊

孝女伊知同胞五人の傳にして、中井發菴先生の著、

富貴村良農事狀 一 冊

良農治郎左衛門が仁恤濟世の行實にして、發菴先生の著、

蒙養篇 一 冊

中井竹山先生が童蒙の爲に、修身齊家の大道を平易簡明に記述せられたる者、

貞婦さんの記録 一 冊

竹山先生がさんの貞操を表彰し、其窮狀を訴へて、世の慈善家に救恤を促がされたるの書、

以上合卷、懷德堂五種と題す、

奠陰集 十 冊

竹山先生一代の詩文集にして、手稿本、寒泉編次本の二種存す、今は清嘉堂文庫所藏寒泉編次本を底本とし、手稿本を以て對校し、五冊に合裝せり、

竹山國字牘 七 冊

右は摘抄編次して二冊とせり、

論語逢原 二十 冊

中井履軒先生の著、三村崑山手寫本を底本とし手稿本を以て對校し、四冊に合裝せり、

勢語通 四 冊

五井蘭洲先生の著、伊勢物語の注脚書なり、平瀬家本を底本とし、手稿本を以て對校し、二冊に合裝せり、

蘭洲茗話

二冊

大阪府立圖書館本を底本とし、數種の傳寫本を以て對校し、一冊に合裝せり、

通計 十五冊

かくて其校正は、懷德堂五種を委員上松寅三君、奠陰集詩の部を同磯野於菟介君、文の部及び竹山國字讀の抄校を同木崎愛吉君、論語逢原を中井木菟磨君、勢語通を同一柳安次郎君、蘭洲茗話を同大道弘雄君、に依囑し、題籤は古法帖によりて集字し若くは自筆の題簽を景刻し、校葉記印は中森松韻君の手刻に係る、印刷製本は委員松村九兵衛君之を擔當し、阿波座堀越日進堂、東京愛宕町東洋印刷株式會社に命し活字版に附せり、

祭典當日一部十五冊を靈案に奠して、其成功を告げ、殘本は各種會員に頒てり。

第五章 講演

(一) 講演日程と演題

十月六日七日の兩日、中之島公會堂に於て記念學術講演會を開く、司會者は委員角田勤一郎君にして、其

講師及び演題左の如し

六日午後五時より

開會の辭

日本近世の文化に就て

竹山先生の學問文章と尊王

履軒先生の經學

儒教と社會政策

七日午後一時より

開會の辭

三教の辯

履軒學の影響

懷德堂の感化圈

教育の目的

草茅危言

(二) 講演會概況

文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士
小山健三氏	内田銀藏氏	星野恒氏	狩野直喜氏	市村瓊次郎氏	植村俊平氏	藤澤南岳氏	内藤虎次郎君	三宅雄二郎氏	菊池大麓氏	杉浦重剛氏	理學博士	理學博士

六日午後五時半開會し、副會頭小山健三君登壇し開會の辭を演べらる、其大意

懷德堂記念會は、畢竟時代の要求に連れて起りたる者なり、今後大阪市民は斯かる精神的の事業にも倍熱心ならんことを市民の一員として切望す、(文責は記者に存す、以下同断)

次に京大教授内田文學博士は「日本近世の文化に就て」なる題下に

文明の要素には有形と無形とありて、文明は精神的文明及び物質的文明を總稱し、文化は専ら精神的文明を稱す、精神的文明の發達ありて物質的文明を導き、物質的文明はまた精神的文明に資することあり。併し何れが主たり何れが従たるかと云へば、精神的文明は其主にして今日の所謂文化なり。而して一國民一時代の文化は第一文化の性質、第二文化の傾向、第三文化の負擔者を知るを要す。日本近世の文化の性質は儒教的なり、殊に徳川時代に於て然りとす。而して其傾向は急進的の者にあらずして停滯的なり。是れ儒教の趣旨が専ら古を尊ぶに在りしに加へて封建制度鎖國主義が其原因をなせしならんも、其半面に於て一步一步向上して已まざるの潛勢力ありしを認むることを得。竹山履軒兩先生の學風の如きも徒らに古を尊ぶの孤城に籠居せずして進歩的の者なりき。當時は國學の勃興あり蘭學の輸入ありて、漢學者も國學と西洋學の智識を捨てず、西洋學者も亦相應の漢學者なりしなり。最後に日本近世の文化の負擔者とは何人なりしか、狹義に解すれば何れかの學者なれども廣義に解すれば何れかの階級に屬す。世人多くは武士の階級に在りと爲せども、公家も百姓も亦與つて大に力あり、殊に町人に至りては最も大なる者なりとす。都市の發達に伴ひて町人の勢力を得るに至るは自然の數なり。徳川時代の學問は僧侶武家の專有物にあらずして町人にも及びて、大阪に於ける懷德堂の如きは其好例なり。かくて儒教も實學の主旨を忘れず、町人に適合する様に教育されし者にて、隨て町人の階級よりも學者を輩出したたり。

竹山履軒の門より出でたる山片蟠桃の如き其一例なり。更に當時の商業道德を見るに思ひの外律義なりき、組合の發達の如き手形取引の如き大に見るべき者あり云々。

次に東大教授星野文學博士は「竹山先生の學問文章と尊王」と題し

幼時竹山の逸史を愛讀したる事より説き起し。偕竹山先生の最も精力と歲月を費して著述されたるは逸史にして大阪人士が徳川家康を誤解せるを辯せんとて書かれたる者にして、文章より云ふも出色たり。叙事の間論評の間豊臣氏を貶し徳川氏を稱揚して寧ろ過ぎたるの觀あり。去れど逸史の論は實に司馬遷の史記と相争ふに足る者あり。又先生の皇室を尊崇せられたるは、白川樂翁公の教を乞はるゝに答へて草茅危言を書き、其冒頭に幕府は須らく皇室を尊崇すべしと論じ、春秋兩季の行幸の議、論の復興、皇子皇女の薙髮を廢止し皇子は親王とし皇女は降嫁するの要を説きたるが如きは、先生の言の時弊に適中し又幕府の威勢に屈せず、其言はんと欲する所を言ひ得て、尊王の主義明かに看取することを得て恰も空谷に登音を聞くの觀あり。其他改元の廢止、曆本販布の制度及び京都に學校建設の要を説きて今日の學習院の設けらるゝ動機を作りしは、其功績没すべからず。若し夫れ九朝の上に御詮議あらば竹山先生の如き必ずや恩命に接せらるゝの期ありぬべしと信す云々。

夫より竹山先生の教育主義を例證し、今日の記念會を一時的のものたらしめず、道德實踐を旨とし商業道德を盛ならしむるの覺悟なかるべからずと結びて聽衆に多大の感動を與へて壇を降り、次に杉浦重剛君「草茅危言」の題下に

大阪に對する予の感想六あり第一仁德帝の遺跡なる事、第二朝鮮征伐の時豊太閤が彼地をして我が文字

を用ひしめんと言へる意氣、第三天野屋利兵衛の義氣、第四懷德堂、第五大鹽中齋、第六藤澤前代議士が議會にて名教に關する演説を爲せる事はなり。是等は他國に類例なき處なり。現代國民は一方に財政困難を唱へながら一方に拜金思想旺なるを憂ふ、是れ大矛盾にあらずして何ぞ。惟ふに東京は我國の腦髓なれば大阪は心臟なりと云ふべし。此我國の心臟たる樞要なる地位を占め、此の他國に於て曾て見るべからざる六種の歴史を有するの名譽を負へる以上は、大阪人士は宜しく率先して現代我邦の財政困難、風教頹敗を救ふの任に當るべし。草茅危言は實に時弊を指摘せる快著なり、此の快著に關係深き大阪市民は大に警醒するところあるを要す。懷德堂記念祭は單に昔を慕ふを以て本旨とせず、其趣旨を實踐するを要す。古來全國に對する模範の大阪より出でたるもの多し。將來の我國は草茅危言の精神を實踐し、財政風教等の諸問題を整理せざるべからず云々。

最後に狩野文學博士は「履軒先生の經學」と題し

履軒先生の學は支那の如何なる學風の影響を受けしか、將た一人より受けしとせば果して如何なる學者なりしか、是れ余が此處に講せんとする所なり。先生は多才多藝にして其研究は種々の方面に亘りしも其大本領は經學に存す。先生と竹山先生とは懷德堂の大立物なるが、其學說に差異あり。竹山先生は篤實なる程朱學者なるも履軒先生は決して然らず。其著論語逢原に程子は宋に於て禪學旺盛の間に出了たり、禪は異端なる佛教中の異端なり、程子は其異端なる禪に感染せり、則ち後世の學者は全然程子を信奉すべからずして慎重選擇する所あるべしと。又曰く一商家の商品に附する符徴は他商家には解する能はざると同じく、孔孟の家の符徴は程朱の家には解する能はざる所なり、故に學者は宜しく直接に孔孟

の家の符徴を研究して其帳簿を檢すべしと。斯くて履軒先生は決して一家の説に拘泥せず、諸家を參酌融和して自家藥籠中の物となし、夫に由りて大膽に其説を吐露せり。抑支那の經學は之を三大時期に分るを得、第一漢唐訓詁時代、第二宋明理學時代、第三清朝考證時代是なり。始皇の燔書より一旦孔孟の道絶えたるも漢に至り稍復興せり。當時に於ては學問に夫々流義ありて、學者は各其範圍を脱するを得ざりしが、南北朝時代に至り學風は南北に分れたり。唐代に至り學問の統一を圖り、前代よりの種々なる註釋を一定し學者をして之れが布符を爲さしめ、之を疏又は精義と稱し、官定の教科書として學生の必讀書となれり。殊に唐時代は經學よりも詩文流行せり、從て唐の文明を輸入せる我王朝時代には經學の著の見るべき者なし。當時の文官試験には經書と文章との二種ありたるが、多くは後者に由りて出身せんことを喜べり。されば經學の研究は其範圍極めて狭く、一學者の註釋を學びて一子相傳と稱し、累世相傳へたる程なり、然れば經學の研究は終に與らざりき。彼の國に在りては宋の始に學風一變し、王安石の如き大膽なる學者出で、忌憚なく經學を批評的に研鑽することとなり、夫より學者間に經の本文に關する疑問を生ずるに至れり。歐陽修、蘇軾兄弟、王安石、司馬光の如き其著しきものにて、易經を批評し孝經を駁し大學を補ふなど意氣極めて旺なり。殊に宋の末に朱子四傳の弟子なる王柏出で書疑、詩疑を著はし大に學者を聳動せり。履軒先生は此の王柏の影響を受けたるものゝ如し。其説に曰く書經も詩經も孔子の手を経たるものにて疑ふべからざるに似たれど、一時缺損錯簡せる事ありて漢時代に補填せるものなりと。先生は實に此を鑑別し大膽なる改革を加へたり。此く本文に批評を加へ孔孟の眞意を曉るべしと叫べるは嘆賞すべし。先生は文化十四年八十六歳にて歿せるが、其頃江戸には清朝に起れる考

證學輸入せしが如し。若し先生に尙少しく壽を與ふれば、如何なる大發見を爲したるやも知るべからず。我邦の經學は之を支那に逆輸入して誇るに足るものは唯仁齋、徂徠、履軒三先生のあるのみ云々。午後十時二十分無事に第一日の講演を終れり。聽衆約千名、會場を出れば門内には懷德堂當時の様見えて篝火炎々として高く天に沖り、低く土佐堀川の水に映して赤かりき。

市村文學博士の講演は都合に由り第二日に延期せり、

記念講演會第二日は七日午後一時より開會し、發起人植村俊平君は開會の辭として

明治維新は内外の長短を取捨せられたるが、中には却て其長をも去りたるありき、其反動として近頃に至り長所の保存に氣附きたるは極めて喜ぶべく、懷德堂記念會の如きも即ち其一端なり云々。

と論じて次で本日講演せらるべき講師を一一紹介して降壇す。夫より市村文學博士登壇、「儒教と社會政策」と題し

儒教と社會政策との關係を明かにせんには、儒教の本領を知らざるべからず。抑も儒教の本領は人生の幸福安寧を圖るに存す。此本領を發揮するに當り、根本となる者は人性問題なり。孔子は性を論せず、孟子は性善、荀子は性惡、楊雄は性混在、韓愈は性を三等に分てり。然れど善惡は性の結果に就て云へるものにて、其本體の如何を斷定せざるを以て、原始的儒教の精神に適する者と云ふべし。儒教にては人は個人としてなく、社會的一人として觀察し、爰に始めて倫理説生ず。人類の幸福安寧を圖るとは國家社會の幸福安寧を圖るなり。然らば之が標準となるものは何ぞ、「仁」の一字是なり。此「仁」の意義を明にすれば即ち儒教の本領を明かにするを得。「仁」とは即ち人道にて、人道とは親愛調和の意なり。

此親愛調和を圖るに必要なるは忠恕と禮法なり。即ち忠恕は親愛調和の原動力にして、禮法は其機關と云ふべし。換言せば「仁」の一字には内外二方面あり。內的方面は忠恕にして、是に由りて親愛調和の原動力を生ず。此の精神の國家社會に現れたるもの、即ち人倫道德なり。故に人倫道德を完備せば、「仁」の內的方面を異にするを得れども、複雑なる人類の幸福安寧は、人倫道德のみを以て維持する能はず。此に於てか「仁」の外的方面の必要を生ず。「仁」の外的方面は禮法にして今日の政治經濟は之に屬す。禮法は即ち國家社會の制度と云ふべく、之を五種に大別す。第一 統治機關、第二 生活機關、第三 防禦機關、第四 教化機關、第五 交際機關是なり。此五種の機關具備せざれば、國家社會は圓滿に運轉する能はず。以上内外二方面の親しく關係するもの、即ち政治道德の調和なり。此調和成りて「仁」始めて完全に實現す。此兩方面を連絡する媒介は、克己と復禮となり。克己は內的、復禮は外的方面に屬す。此兩方面は時代に從ひ變遷すべきものにて、此變遷を巧に調節して始て人類の幸福安寧を維持するを得。古來の儒者に此兩方面を調和せるもの多からず。唯朱子を數ふべく、我邦にては中井竹山先生即ち是なり。先生の著「草茅危言」を讀めば之を知るを得。翻つて社會政策を考ふるに、斯は一言以て之を言へば、社會狀態の改善を圖りて、人類の幸福安寧を企圖するに在り。社會政策は儒教より觀察すれば「仁」の外的方面に屬し。殊に其生活機關に屬するものなり。支那に於て古來社會問題の起らざる所以は四あり。第一 貧富の間隔少なき事、第二 生活の容易なる事、第三 國民の服從思想盛なる事、第四 社會的事業の發達せる事是なり。我邦にては古は同様の原因に由り社會問題起らざりしが、封建時代には確かに之を胚胎せり。幸ひ維新の革命は之を解決せり。されど近頃に至り、泰西文化の輸入と共に權

利觀念起り、貧富の差甚だしくなり、生活困難の聲次第に高まりつゝあり。此勢を以て進まば、或は社會問題の次第に喧傳さるゝやも知れず。是に於て益儒教の仁政の必要を感ず。社會政策は此儒教的仁政の方針を以てせざるべからず云々。

次で藤澤南岳翁は「三教の辯」と題し

古來支那に在りては儒、佛、仙を三教と稱したりしが尋で楊、墨、儒を稱することゝなり。我邦に於ては神、儒、佛を三教と並稱せしが、近頃に至りては佛、耶、儒を稱することゝなれり。かく三教の内容は種々變遷したれども、儒は常に相ひ稱せられて三教の一たりき。三教の世道人心を融治することは、今更辯を用ひるを要せず。殊に今日は風教文教てふ語の大に世人の稱揚する好機に逢會せば、儒を以て一世を風靡せし懷德堂を記念せる本會の教化の及ぶ大ならんことを切望す云々。

引續き内藤文學博士登壇「履軒學の影響」と題し

第一、時代の上より及ぼせる影響を述べんに、徳川時代の主要なる學者は仁齋、徂徠、履軒の三先生なるは争ふべからず。然れど仁齋徂徠兩先生と履軒先生とは大に相違あり。仁齋、徂徠兩先生は最初より一個の見識を立て門戸を張れるが、履軒先生は多くの書籍を讀破する間に、次第に湧出せる思想を集めたるもの、自から發明となり、見事なる成績を表はせるなり。時代の上より言へば仁齋先生は古學と名乗れども、支那人の所謂古學即ち漢唐學ならず。學問の筋道は宋學の一派と言ふを得。宋學は理氣の二に分るゝが、仁齋先生は其中の氣に重きを置き。徂徠先生古文辭の學と名乗れるも、同じく宋學なり。履軒先生も亦然り。履軒先生の學風は之を人にまじれば、明末の顧炎武、吳廷翰兩儒に酷似す。顧炎

武は經學を主とし傍ら古語遺物などの研究をも爲せり。履軒先生は少しも顧炎武の著書を見ざりしかど大に類似せり。故に履軒先生の我邦に於ける地位は、恰も支那に於ける顧炎武の地位に相當せり。徂徠、仁齋兩先生の學は其門弟の手に由りて弘まれるも、履軒先生は以後の學者が勝手に弘めたるなり。王政維新は經學に頓挫を與へたる者なるが、此れ無かりしならば履軒先生の影響更に多かりしならん。第二、先生個人の性格より及ぼせる影響を述べんに、履軒先生は不思議の性格を有し、恰も芒星に類す。懷德堂に關係ある贅菴、竹山諸先生の間に交り、履軒先生は一異彩を放てり。敢て門戸を立つるの意なく、天與の才能を發揮して一見識を表はしたるものにて、從ふて其影響も芒星的にして門人に由り傳へられず、何人にも先生の書を讀める人に少からざる感化を及ぼせり。約言せば先生は極めて氣紛れ者と云ふべし。先生の氣紛れは、大阪なる土地の感化を受けたるものなるやも知れず。大阪には往々氣紛れ者を生ず。大鹽中齋の如き其尤なる者なり。然れど氣紛れも應用に由りては利益なきにあらず。兎に角履軒先生は氣紛れ者の代表者と言ふも過言ならざるべし云々。

之に繼ぎ三宅雪嶺博士は登壇、「懷德堂の感化圈」なる題下

日本の版圖は東西に延び、東の中心は關東又其中の江戸、西は畿内而して奈良、大阪、京都が中心たり。新聞にても大阪は第一なり、東に行かずとも西を支配し、東都の新紙は東を支配すれども西に及ばず。然し新聞は大阪が中心なり。大阪に學問の起る前は、京都には伊藤仁齋、東涯ありて江戸を壓倒するの勢なりき。然るに竹山、履軒兩先生時代には、大阪の勢力範圍にて少くとも江戸に對抗するに足るの方ありき。中には江戸の學、中井兩先生に及ばずと論ずる者もありし程なりしに、其後絶えて振はざり

し原因は如何。之を内に求むれば懷德堂後繼者の選擇を誤りしことに屬す。若し夫れ佐藤一齋先生の如きをして繼がしめば、或は後世振起せしならんか。江戸の林家は此選擇を誤らざりしが故に後に至りても盛大を極めたり。更に原因を外に求むれば逸史を書きて幕府に諂ひたるものと考へられたることなり。竹山先生は八代將軍の時に生れ、將軍の偉大なるを景仰せしは自然の數なりと雖も、朝廷を思ふ者の側よりは八代將軍は悦ばれざりしなり。加ふるに同時代に頼山陽あり、故ありて竹山、履軒兩先生と相合はず。山陽は新聞記者の如く、實際の上に功績あり。維新の政變によりて山陽は益勢ひつきしに反比例して中井兩先生の勢は漸次衰へたるは已むべからざるなり。更に大阪が京都の學問の勢力を受繼ぎて盛んなりしに拘らず。京都に大學の設けらるゝ時ですら何の沙汰もなかりしは惜むべし。然し近來は其勢一變し、京都に大學の設けられし當時に比すれば餘程教育に熱心になりしが如し。菊池總長は大學は京都に置かずして、大阪に設けべきものなりしと云へりと。大阪は此大學設置の過ちを過ちとして捨て置くべきか。今後依然懷德堂時代の盛を見る能はずんば、大阪人士の教育に不熱心なる察するに餘りあり。又昔時懷德堂が幕府より資金三百兩を仰ぎたるは、門弟中富豪者ありしに不似合の事と稱すべし。今日ハ醫科大學のみにても三百兩にては足らず。資金を國庫に仰ぐも差支へなきが、然し此の先きが大問題なり。今般の懷德堂記念會のみにては竹山、履軒兩先生の志を感むるに足らざるべし云々。

最後に京都帝國大學總長菊池男爵登壇「教育の目的」と題し

徳川五代將軍時代に起れる士族教育、八代將軍時代に起れる平民教育は、何れも其目的は道德教育、換言せば修養教育なりき。修養教育の結果は高き人格を出だすものなれば、極めて結構なる事なれど、教育

のみにて道徳の向上を得ると思考せるは、當時の教育に於ける謬見なりき。近來に至り工藝隆盛となるに連れ、教育上に大變動起れり。英、佛、獨などにも羅門、希臘など古語に由る教育と科學に由る教育との間に議論常に絶えず。然かも後者に勢力あるは争ふべからず。科學教育、職業教育を眞先に起せるは獨逸にして、之と同時に普通教育をも盛に起せり。勿論職業教育には種々階段あれど、獨逸にては其各階段に適するだけの普通教育を施しつゝあり。普通教育は修養教育にして之を十分に施し、其上に職業教育を施すの必要あり。我邦にては明治六年新學制頒布と共に唯西洋の形式のみを取りたるため、職業教育に力を注ぐに反し、修養教育は閑却せられたり。幸にも當時高等教育を受くるものは何れも俊才なりしより、準備教育を受けずして相當の材を得しも、今は然らず、宜く十分の準備的修養教育を盛ならしむる必要あり。教育は國家の大計なり、汎く公平の意見を以て立論すべし。現今教育上の誤謬尠からざるが、其重なる二三を摘述せんに、第一餘りに専門的、分科的にて根本的、抱括的を忘却せり。第二智識を授くるを主とし、自から智識を開發する方法を授けず。第三法律萬能の傾向あり。之を要するに、普通教育は職業教育の多くの階段に順應して、而かも成るべく高からんことを期すべく、智識を授くるよりも方法を授くべく、教育には教師の重要なるに留意すべし。是等は教育をして最も有効ならしむる方法なり。元來教育は其結果の表はるゝ遅きものなれば、動もすれば閑却さるゝ傾あり。此點に關して懷德堂記念會の擧行を最も喜ぶものなり云々。

時に午後六時三十分なりき。

第六章 遺物展覽

懷德堂先賢を景慕するの餘り、中井家をはじめ諸家襲藏の遺書遺物を展觀して、公衆と共に其餘薰を挾すべく、水落庄兵衛君外二十一名を委員に囑托せり。

數回の委員協議會を経て、明治四十四年九月八日出品勸誘狀に諸先賢の名簿を添へて發送し、勸誘に着手せり。先是中井家襲藏の遺書、遺墨、遺物は本展覽會終了後は、擧げて永く本會に寄託保管の申出ありたり。

かくて諸家襲藏の先賢遺物は、十月一日より六日まで、府立大阪博物場美術館に於て展觀することゝし。九月廿九日より陳列に着手せしが、遺物襲藏家の厚意と委員諸君の盡力とは出品多數の盛擧となり、一美術館の克く收容し得る所にあらず。されば止むなく其一部に陳列替を施して以て塵に其厚意に酬ゆることゝせり。於是遠近の人士來り觀る者、日に多きを加へ、うたゞ展觀の期日の短きを憾ましめき。

陳列品目録は委員水落庄兵衛君、磯野於克介君、木崎愛吉君の手によりて編纂印刷され、廣く會員其他にも配付せり。」

中井木菟麿氏より本會に寄託されたる遺書、遺物は當分大阪府立圖書館長今井貫一氏に保管を依頼せり。其目左の如し。

懷德堂記録

一學問所建立記録 一册

一懷德堂丙事記 一册

一懷德堂定約附記 一册

一懷德堂外事記 一册

- 一 學校公務記錄 二册
- 一 御同志中相談覺 一册
- 一 逸史獻上記錄 一册
- 一 助成金書類 一册
- 一 懷德書院揭示 一册

懷德堂遺書目

- 一 禮斷 五册
- 一 四書斷 四册
- 一 萬年先生遺稿(竹山先生手寫并序) 一册
- 一 非微(竹山先生手寫原本) 八册(內一册闕)
- 一 紀第一(蘭洲先生草本) 一册
- 一 尙書管見(同上) 一册
- 一 逸史自序進履 一册
- 一 逸史進履質疑 一册
- 一 竹山先生首書近思錄 四册
- 一 鷄肋篇疑文(竹山先生手寫) 一册
- 一 箕陰略稿(同上) 一册
- 一 遊芳山記(同上) 一册
- 一 東磴(同上) 四册
- 一 草茅危言(同上) 五册
- 一 竹山先生國字贖續編 一册
- 一 箕陰消息(竹山先生草本) 一册
- 一 竹山先生草稿 一册

- 一 懷德堂義金簿 一册
- 一 三宅幸藏宅宅ニ付御同志中懸合覺 一册
- 一 義金助成金簿 一册
- 一 竹山先生遺狀 五通

- 一 詩斷 四册
- 一 萬年先生論孟首章講義 一册
- 一 非物篇(竹山先生手寫原本) 六册
- 一 蘭洲先生刪正日本書記 四册
- 一 易斷(竹山先生手寫原本) 五册
- 一 逸史草本(首卷子卷合本) 十二册
- 一 逸史進履草稿 一册
- 一 左傳比事歸(竹山先生未定草本) 三册
- 一 靖獻遺言(竹山先生遺稿) 二册
- 一 箕陰集(竹山先生手寫原本) 二十册
- 一 竹山居士東征稿(同上) 一册
- 一 西園集(同上) 一册
- 一 閑距餘筆(同上) 一册
- 一 竹山先生國字贖草本(竹山先生手寫與他人所寫相半) 八册
- 一 竹山先生國字贖附卷 (一册)
- 一 龍野貞婦記錄(同上) 一册
- 一 葦園隨筆(竹山先生鈔寫) 一册

- 一 明史鈔(同上) 一册
- 一 四書句辨(同上) 一册
- 一 二程全書、延平答問、南軒文集、讀書記、千百年眼、韓柳文、群談採餘鈔(同上) 一册
- 一 走馬看燈(朱子文集鈔、竹山先生鈔寫) 一册
- 一 代登(無覽錄他四篇) 一册
- 一 蕉園先生首書周易傳義 五册
- 一 蕉園先生首書禮記集說 十册
- 一 蕉園先生首書學庸論孟 三册
- 一 武經七書(蕉園先生遺藏) 八册
- 一 東萊博議(同上) 四册(內一册闕)
- 一 蕉園先生手寫古文真寶雜題 二册
- 一 一宵十賦前編草稿(附履軒先生評語) 一册
- 一 甲史(蕉園先生草本) 一册
- 一 蕉園先生文稿 一册
- 一 炎窓代睡(同上) 一册
- 一 石窩草稿 一册
- 一 碩果先生編次史記彤題集(碩果先生手寫原本) 四册
- 一 春秋闕文表(同上) 一册
- 一 古今二徵(桐園先生寫) 一册
- 一 通語(袖園先生寫) 三册
- 一 周易廣義(石窩先生題籤) 六册(內五册闕)
- 一 嬰祭私說(石窩先生題籤) 一册
- 一 蕉園先生手記 一册
- 一 學中詩韻淺 蕉園先生遺藏) 一册
- 一 日本史鈔書(同上) 一册
- 一 詩漁(竹山先生鈔寫) 一册
- 一 碎錦(語葛武侯集他十九篇、同上) 一册
- 一 稻垣濠之丞純孝記錄 竹山先生題籤) 一册
- 一 蕉園先生首書詩集傳 四册
- 一 春秋胡傳(蕉園先生遺藏) 三册
- 一 蕉園先生首書左傳 十五册
- 一 歷朝捷錄(同上) 二册
- 一 蘇文忠公集選(同上) 十二册(內五册闕)
- 一 彫蟲篇(蕉園先生手寫原本) 二册
- 一 囉碧渡(蕉園先生草本、碧渡不全) 二册
- 一 越史(蕉園先生草本) 一册
- 一 杞憂漫言(蕉園先生手寫原本) 一册
- 一 有和年表內篇(同上) 一册
- 一 碩果先生文稿 一册
- 一 春秋亂賊表(碩果先生寫) 一册
- 一 安齋叢書抄(同上) 十二册(內三册闕)
- 一 履軒髮言(同上) 一册
- 一 陽明文錄(寒泉先生題籤) 十册(內一册闕)
- 一 不問語 一册
- 一 彫蟲自爲(蕉園先生手錄) 一册
- 一 唐詩選(蕉園先生遺藏) 一册
- 一 怡顏齋櫻中懷德堂遺藏) 一册

一懷德堂藏書目(寒泉桐園二先生手錄) 一册
一逸史 十三册
一蘭洲先生遺本康熙字典(蘭洲竹山二先生首書)
一勢語通(蘭洲先生手寫原本) 四册

水 哉 館 遺 書 目

一七經逢原(履軒先生自寫原本) 卅二册(內八册闕)
一周易(三册) 尙貴闕) 古詩(闕) 古詩得所編 一册) 古詩古色(一册) 左傳(六册) 論語(四册) 孟子(七册) 大學雜議(一册)

中府(一册)

一中府天樂樓定本(履軒先生手寫原本) 一册
一履軒先生旁註伏生尙書(同上) 一册
一詩彤題(同上) 七册

一周易彤題附卷(同上) 一册
一尙書彤題附言(同上) 一册

一禮彤題(同上) 二十册(闕)
一論語雕題(同上) 二册

一易雕題略(同上) 三册
一典謨接(同上) 一册

一左氏雕題略(同上) 三册
一中府雕題略(同上) 一册

一孟子雕題略(同上) 二册
一履軒弊帶(同上) 一册

一履軒弊帶季編(同上) 一册
一水哉子(同上) 二册

一洛汭奚篈(同上) 一册

一履軒先生考定梅賾古文尙書(同上) 一册
一周易雕題(同上) 三册
一尙書彤題(同上) 六册
一詩彤題附卷(同上) 一册
一左氏彤題(同上) 十五册
一學府雕題(履軒先生手寫原本) 一册
一孟子雕題(同上) 二册
一尙書雕題略(同上) 二册
一詩雕題略(同上) 三册
一禮雕題略(同上) 三册
一論語雕題略(同上) 二册
一通語(同上) 三册
一履軒弊帶續編(同上) 一册
一髮言(同上,下卷闕以草本補之) 二册
一履軒古風(同上) 二册
一枕上雜題(同上) 一册

- 一 諧韻珊瑚(同上) 一册
- 一 深衣圖解(同上) 一册
- 一 詰辨(同上) 一册
- 一 服忌圖(同上) 一册
- 一 履軒外集(月可錄、年成錄、同上) 二册
- 一 華胥國物語(同上) 一册
- 一 華胥國新曆(同上) 一册
- 一 恤刑茅議(同上) 一册
- 一 古今二微(同上) 一册
- 一 遺草合卷(同上) 一册
- 一 經界圖(同上) 一册
- 一 越吟(同上) 三册
- 一 古郡多飛(同上) 一册
- 一 越組弄筆(同上) 一册
- 一 三國志雕題草木 一册
- 一 鷄肋疑文(同上) 二册
- 一 瑣語疑文(同上) 一册
- 一 簡諺篇(同上) 一册
- 一 履軒雜說彙編(履軒先生鈔寫) 二册
- 一 常言(同上) 一册
- 一 無題抄本(同上) 二册
- 一 柳文(同上) 一册
- 一 新採百首(同上) 一册
- 一 本草目錄(同上) 一册
- 一 履軒古韻(履軒先生手寫原本) 一册
- 一 連珠年表(同上) 一册
- 一 傳疑小史(同上) 一册
- 一 絕句逢原(同上) 一册
- 一 有間星(同上) 三册
- 一 華胥國歌合(同上) 一册
- 一 華胥國語(同上) 一册
- 一 辨妄(同上) 一册
- 一 老婆心(同上) 一册
- 一 昔の旅(同上) 一册
- 一 刀甲辨(同上) 一册
- 一 風懷百首(履軒先生手寫原本) 一册
- 一 述龍篇(同上) 一册
- 一 數聞(同上) 一册
- 一 櫛聲篇(履軒先生草木) 一册
- 一 質疑疑文(同上) 一册
- 一 六書要語(履軒先生選并手寫) 一册
- 一 足利史草木 一册
- 一 履軒臥友(同上) 一册
- 一 士喪禮(同上) 一册
- 一 襍抄(同上) 一册
- 一 五代論(同上) 一册
- 一 經解目錄(同上) 一册
- 一 日本史目錄(同上) 一册

- 一 寶曆測量圖(同上) 一册
- 一 西卷(同上) 一册
- 一 度量考提要(履軒先生鈔寫) 一册
- 一 制度通(同上) 一册
- 一 小說類集(袖園先生鈔寫) 一册
- 一 紫蘭叢(袖園先生鈔寫) 一册
- 一 隸續(履軒先生題簽) 一册
- 一 治水測論(同上) 各一册
- 一 幽人先生手記 二册
- 一 袖園敎記 一册
- 一 履軒先生雕題莊子 十册
- 一 履軒先生雕題古文前後集 三册
- 一 履軒先生雕題度量衡考 二册
- 一 履軒先生雕題古今和歌集 二册
- 一 水哉館讀法禮記 二册
- 一 袖園先生手寫左傳雕題 十五册
- 一 履軒先生雕題史記 廿九册

掛 軸 類

- 一 懷德堂幅(石庵先生書) 一幅
- 一 朱文公像 一幅
- 一 朱子魚龍變化墨本(懷德堂刻) 一幅
- 一 竹山先生咏福壽草詩幅(誰分禹疇日)
- 一 出懷德堂歌(百あきり 寒泉先生) 一幅

- 一 東卷(履軒先生草稿) 一册
- 一 天經或問卷(同上) 一册
- 一 南類編史(同上) 一册
- 一 袖園先生雜記 二册
- 一 閑距餘筆(袖園先生寫) 一册
- 一 華胥人傳(藍水處士贈履軒先生、履軒先生題簽) 一册
- 一 河圖累棊(履軒先生手寫原本、袖園先生寫) 各一册
- 一 履軒小乘 一册
- 一 唯伏見聞誌(袖園先生手錄) 一册
- 一 天樂樓遺藏書籍目錄 一册
- 一 履軒先生雕題小學 二册
- 一 履軒先生雕題天經或問 三册
- 一 履軒先生雕題世說新語補 十册
- 一 水哉館讀法書經 卷中所插備忘箋係桐園黃裳幼時所記) 一册
- 一 孝經大義(履軒先生首書袖園先生題簽) 一册
- 一 袖園先生色別首書小學 二册
- 一 懷德堂講堂障子(文晁筆歸馬放牛圖) 雙幅
- 一 朱文公四聯墨本(讀聖賢書 懷德堂刻) 四幅
- 一 冽庵先生詩幅(小艇水雲洞口 函簽碩果) 雙幅
- 一 墨菊(泉治醉筆、發庵先生贊) 一幅
- 一 發庵先生看竹詩幅 一幅

- 一 養庵先生有時詩幅 一幅
- 一 竹山先生易 三幅
- 一 幽人先生食毒詩幅 一幅
- 一 抑樓先生詩幅(聞方廣寺火偶作) 一幅
- 一 寒泉先生擬風一篇(維界之浦) 一幅
- 一 桐園先生辛巳歲旦詩幅(茅屋臘塵積) 一幅
- 一 豐前守紀正毅詩幅 一幅
- 一 竹山先生宮錦勸詩幅(七十今朝又添一) 一幅
- 一 逡巡竹碑 關洲先生畫、履軒先生双鉤填墨 一幅

橫 卷 類

- 一 春樓先生詩幅(李白乘舟) 雙幅
- 一 解師伐袁圖贊(岩崎象外筆、履軒先生贊) 一幅
- 一 阿岐兒端午紙幘(竹山先生手製) 雙幅
- 一 中井木菟麻呂端午幘(菊水分派、寒泉先生) 三幅
- 一 桐園先生乙丑元旦詩幅(晨鷄報曉) 一幅
- 一 蛩街先生咏虞美人草詩幅 一幅
- 一 藪孤山詩幅(周公磨茨狄) 一幅
- 一 蛟殿與養庵尺牘(追啓新井筑後守殿云々) 一幅
- 一 文清先生像 一幅

- 一 懷德堂考定中庸定本(春樓先生) 一卷
- 一 懷德堂壽宴詩卷 一卷
- 一 懷德堂卷 二卷
- 一 懷德堂文書 六卷
- 一 學問所建立文書(二卷) 學校再建文書(一卷) 大阪學校書類(一卷) 學務公務書類(一卷) 衛尹御入諸書(一卷)
- 一 先哲手簡 五卷
- 一 竹里先生歌文集 一卷
- 一 逸史進牋(竹山先生) 一卷
- 一 蕉園先生文卷 一卷
- 一 百首贅々殘紙卷 一卷

帖 類

- 一 中府錯簡說(竹山先生) 一卷
- 一 懷德堂會餞詩卷 一卷
- 一 學問所來歷 一卷
- 一 養庵先生歌文集 一卷
- 一 追善之連歌(中井誠之、吉田益枝) 一卷
- 一 蕉園先生詩卷 二卷
- 一 告祖考文(石高先生及寒泉先生代桐園先生) 一卷
- 一 履軒先生行狀(早野小石) 一卷

- 一 懷德堂記帖(石庵先生題字、竹山先生撰并書) 一帖
- 一 懷德堂帖(竹山、蕉園二先生交遊諸名家文詩) 一帖

- 一竹山先生背誦殘紙帖(寒泉先生題簽) 一帖
- 一道澄寺鐘銘(懷德堂鑄) 一帖
- 一蒙養篇(竹山先生) 二帖
- 一十路圖詩(竹山先生評定) 一帖
- 一懷德帖 一帖
- 一發庵先生草書帖 一帖
- 一雕蟲篇附帖 一帖
- 一襄陽帖(同上) 一帖
- 一紫烟帖 一帖
- 一中庸定本 一帖

扁額類

- 一懷德堂刻額 一面
- 一宋六君子圖(懷德堂譚堂絹上小障) 六面
- 一懷德堂記并題字(竹山先生選并書) 一舖
- 一已有閣額(萬年先生書) 一舖
- 一蕉園先生乘筑詩小額 一面
- 一天樂樓記並晉國記(兩面懸額) 一面

屏風類

- 一懷德堂繪圖屏風 一雙

器物類

- 一菊章刀子 一
- 一懷德堂入德門聯(力學以修己、立言以治人)

- 一萬安渡石橋碑(竹山、履軒二先生鑄) 一帖
- 一秋秋帖(同上) 一帖
- 一竹山先生唐詩帖 一帖
- 一混沌諸彥錢叔寶樂志圖引(石窩先生題錢) 一帖
- 一文肅先生碑(春樓先生) 一帖
- 一懷德堂先哲反古帖(大小) 二帖
- 一緩步帖(履軒先生手製、遼巡碑) 一帖
- 一李斯隴山碑 一帖
- 一履軒先生對月帖 一帖

一懷德堂壁署 三面

- 一白鹿洞揭示墨本(履軒先生書) 一舖
- 一曲肱榭額(竹山先生書) 一舖
- 一毋不敬額(竹山先生書) 一面
- 一水哉館額 一面
- 一天圖方圓 二面

一木司令

- 一螺鈿韻匣

- 一 四方竹暴斗
- 一 孝女初手製手巾
- 一 紙製深衣(同上)
- 一 螺鈿算盤(履軒先生所用)
- 一 草島孝子義兵衛屋椽腕架

印章類

- 一 竹山先生印章 八十四顆
- 一 權園先生印章 十六顆
- 一 桐園先生印章 三十顆
- 一 柚園先生印章 十七顆

以上

- 一 逸史及懷德帖題簽木板
- 一 博山香爐(履軒先生手製)
- 一 後水尾天皇御物模造ナフト點笏(履軒先生細書)
- 一 聖賢扇(履軒先生選、柚園先生書)

- 一 竹山先生印池 一個
- 一 石窩先生印章 四顆
- 一 履軒先生印章 五十四顆

第七章 會計

本會の收支決算左の如し

一金壹萬四千八百六拾壹圓貳拾壹錢

內 譯

金壹萬四千參百貳拾五圓五拾錢

內

金五千四百圓

總 收 入 金

會 費 金

發起人十一人出金

金六千八百參拾五圓

金貳千九拾圓五拾錢

金百貳拾九圓

金四百〇六圓七拾壹錢

一金八千百貳拾貳圓參拾四錢八厘

內 譯

金壹千六百七拾八圓八拾貳錢五厘

金九百九拾六圓四拾六錢

金參千五百參拾九圓四拾壹錢

金八百〇四圓拾六錢四厘

金六百六拾壹圓參拾九錢

金百拾圓

金參百參拾貳圓〇四錢四厘

一金六千七百參拾八圓九拾壹錢七厘

右收入之部特志寄贈金は、山階宮殿下の下賜、及び左の諸氏の寄贈に係る。此に特記して厚意を謝す。

金五千疋

金五拾圓

特別會員六百貳拾貳人出金

普通會員千三百七十人出金

特志寄贈金

預金利息

總支出金

總務部

祭典部

記念出版部

遺物展覽部

記念講演部

會計部

寄託遺物補修并殘務處理費

總 殘 高

山 階 宮 殿 下

文學博士 市村瓊次郎氏

金貳拾圓

金貳拾圓

金拾圓

金五圓

金五圓

金貳圓

金壹圓

金壹圓

金壹圓

金五拾錢

第八章 財產

(一) 祭典所用器具其他

文學博士
法學博士

中井木菟麿氏

中井常次郎氏

伊藤介夫氏

有賀長雄氏

無名氏

滋岡從長氏

寺井種臣氏

大町安敬氏

渡邊元成氏

藤鹿之助氏

田中芳助氏

一 祭典次第書木札

一 枚

- 一 神位木主附屬物共
- 一 供物棚板
- 一 八尺臺
- 一 かすみ盆
- 一 國旗附屬品共
- 一 幕
- 一 帳
- 一 提燈
- 一 神酒瓶
- 一 校刊石印
- 一 儂樂寫真
- 一 懷德堂遺書紙型

(二)

献奠書類

- 一 三島博士墨蹟
- 一 藤澤南岳翁墨蹟
- 一 名譽會員書牘

報告書

一	一	二	二	八	一	一	二	一	一	二	五	四	二	一
卷	幅	幅	箱	枚	顆	對	張	掛	張	旒	枚	脚	枚	位

一 社倉私議 楠木氏寄贈

一 冊

一 喪祭私議 同上

一 冊

一 草茅危言 杉浦重剛氏寄贈

十 冊

(三) 殘金及其處分

一金六千七百參拾八圓九拾壹錢七厘

總 殘 高

內 譯 處 分

一金六千圓

但財團法人懷德堂記念會基金トシテ同會ニ寄附

一金七百參拾八圓九拾壹錢七厘

但財團法人懷德堂記念會經常費トシテ同會ニ寄附

差引殘高ナシ

終 章

如上未曾有の盛況を以て記念祭の執行も終了し、殘務の整理も一段を告げしかば、明治四十五年三月十七日會則第十條により剩餘金處分協議會を開き、『剩餘金を基本資産とし、本會と同一の目的の下に、更に法

人組織の懷德堂記念會を創立し、有終の美を濟さん』の議を決し、寄附行爲起草委員を囑托せり。同日、發起人及び會員若干名の會同を求め、會務の報告をなし、承認を得たり。

寄附行爲案は數回の委員會を経て、五月二十一日脱稿せしも、財團法人懷德堂記念會設立者の推薦に幾多の時日を費す、時に御大喪に丁り鼎湖哭泣の餘、荏苒星霜を更めり。

大正二年六月廿七日發起人役員會員若干名を以て、寄附行爲案の協議并に財團法人懷德堂記念會設立者推薦會を開き、寄附行爲案を可決し、同會設立者として永田仁助君、西村時彦君、今井貫一君、水落庄兵衛君、廣岡惠三君を推し。同月三十日法人設立を出願せしが、八月二十日付を以て文部大臣の許可書を交附さる。同二十七日理事會を開き、永田仁助君を理事長に選舉し、九月一日法人登記を得たり。其寄附行爲左の如し

財團 懷德堂記念會寄附行爲

第一章 目的

第一條 本會ハ左ノ方法ニ依リ國民道德ノ進歩ニ力メ學術ノ發達ヲ圖リ本邦文化ノ向上ニ資スルヲ以テ目的トス

一 學術講演會ヲ開クコト

二 講演集及ビ其他圖書ノ編纂出版ヲナスコト

三 大阪先賢ノ事蹟及ビ著書ヲ調査表彰スルコト

四 獎學金ヲ支出シテ學術ノ研究ヲ獎勵スルコト

第二章 名稱

第二條 本法人ハ懷德堂記念會ト稱ス

第三章 事務所

第三條 本會ノ事務所ハ大阪市北區中ノ島公園内財團法人大阪市公會堂建設事務所ニ置ク

第四章 資産

第四條

第五條

第六條

第七條

第八條

第九條

本會ハ舊懷徳堂記念會ヨリ引繼ギタル金六千圓及ビ有志者ノ寄附金ヲ以テ基本財産トス

基本財産ノ管理方法ハ理事會ニ於テ之ヲ定ム

本會ノ經費ハ基本財産ヨリ生ズル利子及事業ヨリ生ズル收入ヲ以テ之ニ充ツ

本會ノ會計年度ハ毎年四月一日ニ始リ翌年三月三十一日ニ終ル

基本財産ハ理事會ノ決議ニ依リ動産ヲ不動産ニ或ハ不動産ヲ動産ニ變スルコトヲ得

本會ニ左ノ役員ヲ置ク

理事 五人 五選ニ依リ内一人ヲ理事長トス

幹事 二人

評議員 三十人

第十條

理事ノ任期ハ二年トス但滿期再選ヲ妨グズ本法人設立ノ際ニ在テハ設立者ヲ以テ理事トシ前項ノ期間在任ス

理事ノ任期滿了シタルトキ又ハ缺員ヲ生ジタル時ハ評議員會ニ於テ維持會員中ヨリ改選又ハ補缺選舉ス補缺理事ノ任期ハ前任者ノ殘任期間トス

第十一條

理事ハ本財團ヲ代表シテ諸般ノ事務ヲ掌理シ理事長之ヲ統括ス

第十二條

本法人設立ノ際ニ於ケル評議員ハ理事會ニ於テ囑托ス評議員ニ缺員ヲ生ジタルトキハ評議員會ニ於テ維持會員中ヨリ補缺囑托ス

第十三條

評議員ハ本財團ノ重要事項ニ關シ意見ヲ述べ且之レガ協議ニ應ズ

第十四條

幹事ノ職務及任免ニ關スル規定ハ理事會ノ決議ヲ以テ別ニ之ヲ定ム

第十五條

本會ニ金壹百圓以上ヲ寄附シタル者及評議員會ノ推薦シタルモノヲ以テ維持會員トス

第十六條

本會附行爲ハ理事會ノ決議ニ依リ主務官廳ノ認可ヲ得テ變更スルコトヲ得

附則

第六章 維持會員

九月九日理事會を開き、寄附行爲第十二條に依り、評議員及幹事の推薦選囑を行へり。於是財團法人懷徳堂記念會の行政機關完備せり。其氏名左の如し

理事

理事長 永田 仁 助君

西村 時 彦君

水落庄兵衛君

幹事

谷川 清 澄君

今井 貫 一君

評議員

池原 鹿之助君

土居 通 夫君

加藤 恒 忠君

高谷 恒 太郎君

竹尾 治右衛門君

村山 龍 平君

植村 俊 平君

山口 吉郎兵衛君

廣岡 惠 三君

藤澤南岳君

男爵 鴻池善右衛門君

小山健三君

宮島茂次郎君

柴直太郎君

芝川又右衛門君

島村久君

廣海二一郎君

樋口三郎兵衛君

平賀敏君

平瀬三七雄君

本山彦一君

男爵 住友吉左衛門君

鈴木馬左也君

(いろは順)

かくて十月二日、懷徳堂記念會會頭住友男爵は其役員を召集して、慰勞の挨拶をなし、財團法人懷徳堂記念會理事に向つて、本會の資産并に中井木菟麿君の寄托物引續きの儀を行はる。以て本會の終結とす。

本會會務報告の遷延せしは、上來略述せし徑路を辿りつゝ、今日に及びし次第につき、會員諸氏に於ては其意を諒し、宥恕あらんことを希ふ。

大正二年十月五日

殘務委員 白す

報告書 (終)